

は し が き

本研究は、文部省科学研究費補助金の助成により、昭和62年、63年、平成元年の3年間にわたり遂行されたものである。

愛着の形成には養育者の子どもに対する応答性がポジティブに関連することが指摘されているが、養育者の応答性がいつ、どのように形成され、子育ての経験を通してどのように変容して行くか、その変容過程にかかわる要因等についてはまだ明らかにされていない。

そこで、本研究では、第一子を妊娠中の夫婦を研究対象として3年間にわたる継続研究を行うことにより、夫婦の子どもに対する応答性が妊娠・出産・育児の過程を通してどのように変容するかを明らかにするとともに、応答性に影響する要因を生理的、感情的、行動的レベルから多面的に分析することにより、養育者の応答性を高めるための具体的な方策について検討することを試みる。

この3年間の研究を振り返ってみて、一番大きな問題は研究協力者の確保ということであった。上越市が主催する母親学級のを借りて研究協力者を募った。協力の内容が込み入ったものであると同時に比較的長期にわたり、夫婦二人の協力を得るというものであるため、協力者を確保することは容易なことでは無かった。特に、夫婦の一方のみの興味・関心や一時的興味では不可能なことであり、妻から協力の内諾を得ていても、実際には夫の協力が得られない場合もあった。また仮に夫婦に協力の意思があっても、夫婦の方から積極的に協力要請を申し出るといような土地柄では無いために、依頼書の配布時に口頭で説明をしたのち、断りの返事をもたらさない家庭に電話で再度協力を要請する手続きをとった。このような手続きを経て得られた協力者は、自ずと被験者としての偏りを持つことは否めない。3年間の時間を費やした結果、幸いにも約30家庭の協力を得ることが出来た。多くの協力者からは今後も引き続き、研究協力の内諾を得ているので、本研究を1つの足掛かりとして更に研究を継続する予定である。関係各位のご指導を戴ければ幸いです。

協力依頼の場を提供して戴いた上越市役所健康衛生課の方々、研究協力を戴いたご家庭の方々、資料収集等に協力を戴いた明石いし子さん、岡本秀美さん、上越教育大学大学院生の近藤里恵さん、その他多くの関係者のご協力を戴きましたことに厚くお礼を申し上げます。

平成2年3月

研究代表者

大瀧 ミドリ (上越教育大学学校教育学部助教授)

研究経費

昭和62年度 900千円

昭和63年度 500千円

平成元年度 600千円

目 次

はしがき	i
I 研究の目的・計画	1
II 応答性の測定	4
1 応答性と感受性	
2 応答性に影響する要因	
3 本研究における応答性のとらえ方	
III 妊娠期の縦断的データの分析	11
1 ビデオフィルムの内容	
2 大学生のビデオフィルム視聴の感想	
3 妊娠の経過とビデオフィルム視聴の感想	
4 ビデオフィルム視聴時の心拍	
5 妊娠の経過と意識の変化	
IV 第一子誕生後の縦断的データの分析	55
1 母親の養育態度と父親・母親の子どもに対する評定	
2 実験場面の行動評定	
3 愛着の形成	
4 実験場面における心拍	
5 資料	
V 応答性	86
1 高応答性群と低応答性群	
2 資料	
おわりに	100
文献	101
資料	104

I 研究の目的・計画

乳幼児の発達初期に養育者に対して安定した愛着を形成することが、その後の社会的、情緒的、認知的発達を促進するための必要条件であることは、Bowlby や Ainsworth など多くの研究者によって示唆されるとともに、愛着の形成には養育者の子どもに対する応答性がポジティブに関連することが指摘されている。しかしながら、多くの研究では愛着と応答性が同時点で測定されており、応答性がいつどの様に形成され、子育ての経験を通してどのように変容してゆくか、その変容過程にかかわる要因についてはまだ明らかにされていない。

そこで本研究では、第一子を妊娠中の夫婦を研究対象として3年間にわたる継続研究を行なうことによって、夫婦の子どもに対する応答性が妊娠・出産・育児の過程を通してどのように変容するかを明らかにすると共に、応答性に影響する要因を生理的、感情的、行動的レベルから多面的に分析することにより明らかにする。さらに、子どもに対する養育者の応答性を高める為の方策について検討する。

昭和62年度は、妊娠中の夫婦が胎児や子どもに対してどのような感情体験を持っているかを見るための1つの刺激として、妊娠の成立・胎児の発達・新生児の能力など日常生活では比較的視覚化されにくい情報を中心にして構成されている。ビデオフィルムを作製し、その有効性の検討に主な時間を費やす。ついで、第一子を妊娠中の妻の妊娠週齢の変化によって夫婦の妊娠の経過や胎児である我が子に対してどのような様にとらえ方をしているかを明らかにするために、妊娠初期、中期、後期の各時期に夫婦を対象に縦断的面接調査を行う。特に、妊娠初期と中期には先に作製した胎児及び新生児の発達に関するビデオフィルムを心拍計を着装し、視聴し、視聴後に感想などについて面接調査を行う。

つぎに各手順について概略する。

1. 夫婦に呈示するビデオフィルムの作製

ビデオフィルムを作製するに当たって考慮したことは以下のことである。

- (1) 視聴内容： 妊娠初期に視聴する内容としては妊娠のメカニズムに関するもの及び視聴時に対象者の胎児にはほぼ一致する週齢までの胎児の様子が視覚化しうるものであること。妊娠中期の内容としては胎児の成長に関する内容を含みながらも子どもを迎える意識などについても聞き取りの内容として予定していたため、新生児の発達の可能性を視覚化しうる内容のものであることを考慮する。
- (2) 視聴時間： ビデオフィルム視聴時に心拍計を着装し、心拍をR-R波で測定することを計画する。使用した心拍計では成人の心拍をR-R波で測定可能な時間が約30分であったため、ビデオフィルムの所要時間は30分以内

とする。

- (3) 内容の決定：上記(1)(2)の手続きによって作製した刺激用ビデオフィルムの効果を測定するために、約100名の未婚の青年男女(大学生)を対象にフィルムを視聴し、視聴後の感想を自由記述で求め、視聴することによって妊娠の成立や胎児や新生児に対してどのような感情を呼び起こされるかについて検討する。

妊娠初期および中期に用いる刺激用ビデオフィルムはいずれもこの手続きによって作製する。

昭和62年度の後半から昭和63年度の前半にかけて対象者の家庭に第一子が誕生する予定であるため、昭和63年度は第一子の生後3・4ヶ月時と7・8ヶ月時に家庭訪問を行い、半統制的状況での父・母・子の相互交渉について行動観察を行うとともに面接調査および半統制的場面時の心拍についてデータを収集する。平成元年度には対象児が1歳の誕生日を迎えるため12・13ヶ月時に前2回と同様の手続きによりデータを入手する。

家庭訪問時期は次の点を考慮して決定する。

1. 初回を3・4ヶ月時とした最大の理由は、対象の夫婦が育児に比較的手慣れる時期であるということにある。さらに、地域的な風習として第一子の出産は里帰り出産が慣例化しており、1ないし2ヶ月までは母親の実家で母子が生活することが多く、父・母・子が一緒に生活を始めた生活が軌道にのるのが3ヶ月頃からと考えられることにもよる。

2. 2回目を7・8ヶ月時とした理由は、この時期には対象児の認知的発達が進み、口頃子どもの身近にいる人とそうでない人との識別が可能となり、いわゆる人見知りが出現する。この人見知り行動は子どもの父母への愛着形成の指標として使用することができることによる。

3. 3回目を12・13ヶ月とした理由は、愛着理論ではこの時期が愛着の形成の完成期とされていることによる。愛着を形成した子どもは愛着対象を拠り所として、周囲の環境を探索可能となるとされている。

3回に亘る家庭訪問は、子と父および子と母における相互交渉を比較するだけでなく、見知らぬ人と子の組み合わせからなる3種の半統制的な実験的場面での行動観察を行うことにより、子の父母に対する関わりの差異を明確にすることを意図して行う。このための場面構成にあたっては、以下の点を考慮する。

子どもの愛着の測定は、「愛着行動は子どもの愛着の対象となっている人から分離された後、再びその対象に再会したときに最も顕著に表出される」というAinsworthらの仮定に基づいて彼等が考案したStrange Situation Procedureと呼ばれる手続きを用いてもっとも多くなされている。そこで、本研究においてもこの手続きに準拠し、分離と再会場面を含む6つのエピソードからなる実験手続きを考案する。

場面構成は、つぎの6つのエピソードからなっており、子どもと父・母・見知らぬ人の

いずれのペアーの場面にも共通である。

- ①遊び場面（約3分）
- ②分離場面・一人場面（約1分）
- ③声かけ（約30秒）
- ④再会場面（約3分）
- ⑤身体接触（約1分）
- ⑥身体接触解除（約1分）

ただし、各エピソードとも子どもの泣きが強いなど子どもが情緒的に著しく混乱を呈したときには、場面を延長あるいは短縮あるいは割愛するなど、子どもの状況により適宜変更するものとする。

各エピソードにおける行動は2台のビデオカメラに収録する。1台のカメラは子どもの表情をとらえることを主目的とし、他は場面全体の流れを掌握するために用いる。

行動評定などの分析はすべてVTRに録画された映像を再生視聴することにより行う。また、子・父・母・見知らぬ人のいずれも開始前に心拍計を着装し、R-R波によって心拍の変化をとらえる。

1組の所要時間は約11分であり、交替などに要する時間を考慮すると実験のために要する時間は約45分程となる。実験終了後、父母について面接調査などを行うため一家庭の訪問には約2時間の時間を要する。実験の前に約2時間の家庭訪問を行い、対象児の日常生活をVTRに収録する。このため各時期における家庭訪問に要する時間は一家庭約4時間ということになる。

II 応答性の測定

1. 応答性と感受性

Ainsworthらは、子どもが養育者に対して安定した愛着を形成するために必要な養育者の要因として、感受性と非感受性 (sensitivity vs insensitivity), 受容と拒否 (acceptance vs rejection), 協調と干渉 (cooperation vs interference), 動かされ易さと無視 (accessibility vs ignoring) の4を指摘している。これら4要因のなかでも、子どもの発する信号やサインに対して敏感かつ適切に時を得て反応するところの「感受性」を特に、重要な要因としている。彼等は、子どもからの信号やコミュニケーションを素早く受信できると共に、それを正確に解釈し、敏速かつ適切に反応することのできるものが、感受性の高い養育者であるとしている。つまり、感受性の高い養育者とは子どもからの信号やコミュニケーションに対して直ちに自分の反応を随伴させることができることを意味しており、むしろ、その特性は応答性と呼ばれる方がより適切であると考えられる。それに対して感受性の低い養育者とは、子ども側の意図よりも養育者自身の思いや気分によって子どもにコミュニケーションするあるいは、仮に、子どもからのコミュニケーションを受け止める時にも自分の立場からその意図を解釈する傾向がある。このように感受性が低くなる状況は、養育者が、疲労、鬱状態、子ども以外のことに気が奪われている状態に置かれているときに生じやすいとされている。

Schafferも発達は真空状態で生じるのではなく、刺激作用に依存するものであり、与えられる刺激の量と種類とタイミングが、子ども自身の心理的体制と密着に関係している必要があるとし、子どもに関わる人々が子どもの状態を旨く読取ることの重要性を指摘している。例えば、子どもを抱き上げて、空中であらっぽく揺らすときには、その人は子どもというものはそのような働きかけを喜ぶものである、あるいはその子がそのようなことをしてもらうのが好きだということを事前に知識なり、体験とでもって行っているわけである。しかし、そのような行為を子どもが喜ぶか否かは子どものその時の状態を離れては有り得ないことである。その結果は、その子どもに関わる人が子どもの状態をどれだけ敏感に読み取っているかに依拠していることになる。これはまさにAinsworthのいう感受性に相応する養育者の行動特性である。Schafferのいう読取りの旨さも養育者の応答的行動を介して子どもに返される必要があるわけで、その意味では読取りの旨さも応答性の1つの構成要因と考えられる。

ところで、応答性に問われるのは、子どもの状態の読取りの旨さだけではなく、養育者から子どもに返される応答の速度も重要な意味を持っている。反応が子どもに返されるまでに要する時間が、生後数週の子どものにおいても大きな意味を持つことは、子どもの条件づけに関する多くの研究によって明らかにされている。子どもの微笑や発声に続いて、母

親が微笑や話し掛けてくれるという予測を子どもがもつようになると、子どもは微笑や発声を多くするようになることが明らかにされている。つまり、子どもは自分の行動によって自分以外の対象にある効果を生じさせることができたという体験を通して、自分の行為と外の世界との結び付きを知るようになる。このような体験によって子ども自身が周囲に影響を与えることができるのだという感覚を発達させることが重要なこととされている。そして、このような感覚の発達には子どもは一貫した敏速な強化を得ることが必要とされる。Millar は6ヶ月と8ヶ月児は、自分の行為とその結果としての反応の返しが1～2秒である時に、自分の行動と環境の変化を旨く結び付けることができるが、それよりも長くなると両者を関係づけることが難しくなるとしている。

また、生まれて間もない子どもと養育者の間に相互交渉が成立する可能性について、Condon は、すべての人間の行動の根底にある基本的なリズムとして同期性(synchrony)を指摘している。つまり、子どもと養育者の間には、同期性という生来的にもっている原初的な絆が存在し、これによって相互交渉が円滑に生じるとしている。小林は、この現象をエントレインメント(entrainment)と呼び、生まれて間もない子どもが母親の語りかけに対して手足を同調させて動かすことを実験的に明らかにしている。Schaffer も養育者と子どもとの相互交渉としての反応における時間的同期(temporal synchronization)に注目する必要性を指摘している。子どもは生まれながらに「ON-OFF」のリズムを持っており、このリズムによって相互交渉の行為者と傍観者の役割を交互に取ることができるとしている。この基本的なリズムは全ての人間が共有しているものであり、このリズムに合わせることで大人の行動と子どもの行動を同調させることができると指摘している。

例えば、母親の多くは、子どもが一生懸命にお乳を飲んでいる時には静かにしており、子どもが一息入ると活発に子どもに働きかけている。つまり、母親が子どものもつ自然の吸啜のリズムにうまく合わせて反応することによって相互交渉が成立しているのであって、相互交渉の成立には子どもが発する行動的な合図の読取りと子どもが作り出す間合いのリズムに、母親のもつリズムをうまく同調させることが関係している。Brazeltonらも母親と子どもの遊びを観察して、子どもの行動には数秒ごとに生じる活動性(arousal)の周期があり、母親がそのリズムに敏感に反応していることを見いだしている。

子どもが生来的に相互交渉の能力を持っていると仮定した場合にも、子どもが相互交渉の相手を持つことなしにその能力の発達を図ることはできない。結局、子どもの活動のリズムに旨く適応して相互交渉を成立させることのできる相手をもつことが、例え生来的に子どもがもっている能力の発達にも重要なこととなる。Schaffer は子どもと相互交渉を成立させる技法として、①同調(Phasing techniques)、②適応(Adaptive techniques)、③促進(Facilitative techniques)、④完成(Elaborative techniques)、⑤先導(Initiating techniques)、⑥統制(Control techniques)の6つの技法を仮定し、相互交渉が成立するために養育者が子どもの要求を正確に知ることと子どもの行動に照らし、養育者の行動を適応させることの大切さを指摘している。

今まで見てきたように、応答性は単独で定義される概念ではなく、必ず刺激と反応というセットの中でとらえることが可能となる概念である。つまり、初発行動に時間的に接近して生じる後続行動との随伴的な関係の中で理解される概念であるため、後続反応を無視しては成り立たない関係的な概念である。さらに、初発刺激に対する応答である後続行動が応答行動として終結するのではなく、相手の応答行動を喚起するという場合もある。その場合には同一の応答行動が初発行動に対しては応答行動でありながらも、後続行動に対しては初発行動となっている。このように応答行動は応答としての機能をもつだけでなく刺激としての意味も合わせもつため、初発行動と後続行動という区別は絶対的なものではなくなる。また、初発する行動の効果は、初発する行動だけによって規定されるのではなく、後続する反応行動の質によって規定されることも多いことを考えると、Schaffer のように相互交渉の成立は養育者側の要因によって一方的に規定されるものではなく、子ども側の要因によって養育者の応答性が規定されることにもなる。

次に、養育者の応答性を規定する要因について検討する。

2. 応答性に影響する要因

養育者の子どもに対する応答性を規定する要因として、子ども側の問題、養育者側の問題、養育環境の問題、分析方法の問題等が考えられる。子ども側の問題としては子どもの気質・子どもの属性等が考えられる。また、養育者側については養育者の対人関係的個人史・養育者の育児経験・養育者の属性・夫婦関係等が考えられる。養育環境については養育者のもつ支援システムの影響が考えられる。分析方法に関しては相互交渉のとらえ方の影響が考えられる。

1) 子どもの気質

養育者の応答性はすべて養育者の子どもに対する感受性や応答の敏速さに還元される訳ではないことは先に見た通りである。例えば、応答性が高いと評定される養育者の場合でも、その応答性が養育者よりも子ども側の特性に依存している場合も有り得る。つまり、子どもの発する信号が明瞭であるために養育者が子どもの状態を関知しやすいということもある訳である。また養育者の世話に対する子どもの応答性や順応性が高いために相互交渉が成立しやすいということもある。このような子ども側の行動特性における個人差が相互交渉の成立に大きく関わることを、Schaffer & Emersonは縦断研究により見出だしている。Escalona も子どもが活動的か否かによって、子どもに与えられる同じ経験も違った効果を示すことを指摘している。これらの結果を考慮するならば、養育者の応答性を問題とする場合、子どもの気質的傾向についても明らかにすることが必要となる。さらに、子どもの性格的な特徴や能力の違いなどの要因の関与にも無視できないものがあ

る。特に、相互交渉ということから考えた場合には、子どもの性格についての客観的な評価よりもむしろ、養育者である父親・母親が子どもの性格や行動の特徴をどのようにとらえているかということの方がより重要な情報と考えられる。それゆえ、本研究においては子ども側の要因については父親・母親の評定に基づいてとらえるものとする。

2) 子どもの属性

子どもの年齢は、養育者が子どもに対していづく期待や子どもの行為を解釈する場合に非常に重要な情報となっている。このことは、子どもの年齢というものが養育者の子どもへの関わりを規制する要因となっていることを示している。また、子どもの性別についても同様であって子どもを中性的に見ている養育者はほとんどおらず、子どもの生物学的な性つまり男の子であるか女の子であるかによって養育者の関わりは顕著に異なることを Lewis や Moss らによって示されている。

3) 養育者の対人関係の個人史

応答性には養育者の個人史的な対人関係との関連を考慮する必要がある。つまり、養育者が子どもに関わる時に、養育者は全く白紙の状態で子どもと対面するのではなく、養育者自身が既に取り込んでいる「子どもとはかくあるべきだ」というような価値観によって養育者自身の行動はある方向付けを受けていることが多い。特に、養育者が持つ子ども観あるいはしつけ観などによって規定されやすい。このような価値観は多分に養育者自身の養育体験を通して個人の中に形成させるものであり、Belsky らは発達初期の子どもに対する積極的な関わりは、母親自身の成育史的な変数から予測されうることを示唆している。また、愛着の形成に関しても2世代にわたる影響が Riccks によって明らかにされており、養育者のもつ価値観が世代間で拡大再生産される特性をもつことが指摘されている。

4) 養育者の育児経験

養育者の対人関係の個人史と多分に重複することであるが、養育者自身が身近な生活空間の中で育児体験を持っている場合は、その方向性は別としても子どもに対して具体的な生活イメージを形成することができる。さらに、そのような体験によってある程度の育児技能の習得も可能となり、子育てに対する見通しと自信ももつことが期待され、このことが養育者の子どもへの関わりに大きく関与することが考えられる。

5) 養育者の属性

子育てにおける父親と母親の差異については必ずしも一貫した結果は示めされていない。父親が応答性に関して母親と同等の能力を持つとする知見 (Greenberg & Morris, Parke & O'Leary) と子どもへの反応や遊び方、身体接触到に相違を認め

る知見 (Lewis & Weinraub, Kotelchuck, Lamb) もある。この問題は今後さらに研究が積み重ねられていく中で明らかにされていくと思われるが、概して発達初期には父母間の育児行動や育児能力に類似を認める知見が多く、その後、徐々に相違が出現し顕著になる傾向が示されている。父親と母親の機能と役割分担は、子どもの発達や家族関係の変容に伴う変化であるとともに、文化的期待に方向付けられて変化し、固定されるものでもある (Berman & Pedersen)。つまり、特定の文化を持つ社会に生活する父親と母親の子どもへの関わりは、生物学的あるいは生理学的の差異をこえて社会的圧力として現実の父親と母親の子どもへの関わりを規定している。日本の文化では子育ては母親の仕事という伝統があるため父親は育児の繁忙から解放されている状況があるというように、養育者の属性、特に性別が子どもへの関わりに大きく関与していることを指摘できる。

6) 夫婦関係

妻が夫からどのようなサポートを得ていると認知しているか、あるいは妊娠を肯定的に受け止めたか否かなどが、母親から子どもへの愛着 (maternal attachment) の形成に影響することが示唆されている。しかし、多くの研究は母と子に集中しており、夫婦関係まで拡大してなされていないのが、現状である。

7) 養育者のもつ支援システム

育児の責任が母親に集中しているか、分担されているか。さらに、母親が育児に疲れたときや母親が自分自身のために時間を使いたいと思ったときに、育児のバトンタッチが許されるような状況、つまり、母親をとりまく家族や家族外の人々による社会的な支援システムを母親がどの程度持っているかが、母親の育児における余裕と大きく関わっていることが考えられる。先にみたように養育者の子どもに対する応答性が日常生活状況によって規定されるということからも、養育者が育児に関してどのような支援システムを持っているかが養育者の応答性と関連を持つことが考えられる。

8) 相互交渉のとりえ方

応答性は先にも指摘したように関係的概念であり、養育者と子どもの関わり合いのとりえ方にも多分に依存している。子どもと養育者の相互交渉行動については、複数のレベルからとらえることが必要である。例えば、VTRなどの機材を利用した録画映像などによって微視的・客観的に相互交渉の分析を行うことは意味のあることである。一方、相互交渉のスムーズさ、楽しさといった全体的な行動の特徴についてマクロ的に相互交渉の分析を行うことも意味のあることである。また、相互交渉の情動的な情報として心拍が有効な変数となりうることは、Frodi & Lamb らによっても指摘されている。複数の分析方法を使用することが応答性の分析には必要となる。

3. 本研究における応答性のとらえ方

本研究では養育者の応答性を次のような観点からとらえる。

本研究では妊娠の初期から第一子の1歳の誕生頃までを分析対象とする。そこで、データ収集の時期を妊娠期と子育て期にわけて養育者の応答性に関与する要因に関しどのようなデータをどの時期に入手する予定であるかについて述べる。

1) 妊娠期の養育者の応答性に関する要因

Leifer は妊婦が妊娠初期に胎児に愛着を持つことが、妊娠後期や出産後の適応の指標となることを示唆しており、また高橋は妊娠初期に妊娠を肯定的に受け止めているものは、妊娠・出産に対して肯定的な気持ちを抱くとともに、我が子に対して愛着をもつ傾向のあること指摘している。川崎らは妊娠全般を通して妊娠に対して否定的であったものは、肯定的であったものに比較して子ども好きでないものが多いとしている。

また、母親および父親自身の親との関係が新しく生じる母子および父子関係に影響を与えることはFrommer & O'Shea, 池田, 佐藤, 藤永の結果から指摘されている。Osofsky & Osofskyは研究を概観して、妊婦の妊娠への適応は妊婦の幼少時の母親との関係、妊娠が仕事などに及ぼす影響、本人の妊娠による変化への適応、さらに夫やまわりの人々のサポートによると指摘している。このように妊娠期にどのような体験をするかによって養育者特に、母親が大きな影響を受けることが明らかにされている。そこで、本研究においては妊娠期の初期（妊娠4ヶ月まで）、中期（妊娠5ヶ月から7ヶ月まで）、後期（妊娠8ヶ月以降）の3回に亘ってデータを収集する。養育者の応答性に関する情報としてはつぎのような点について主として聞き取り調査を行う。

- ① VTRを視聴した印象、特に胎児や新生児に関する感情
- ② 妊娠を確認した直後の情動
- ③ 妊娠確認後の夫の妻に対する配慮
- ④ 妊娠期の行動規制に対する情動
- ⑤ 妊娠に対する不安
- ⑥ 胎児に対する情動
- ⑦ 希望する子どもの性別
- ⑧ 子どもとふれた経験
- ⑨ 親モデルに対する情動
- ⑩ 親になる期待と自信

2) 子育て期の養育者の応答性に関する要因

子育て期のデータは、生後3・4ヶ月時、7・8ヶ月時、12・13ヶ月時の3回の家庭訪問を行い、実験的な場面における子どもと父親・母親の相互交渉をVTRに録

画し、父親と母親の子どもに対する行動評定などを行う。また、父親の育児参加、父親と母親の子どもに対する感じ・子どもの性格評定、母親の育児体験について質問紙による調査を行う。

①父親と母親の行動評定

- a 子どもへの働きかけ
- b 子どもからの働きかけに対する応答
- c 子どもへの気配り
- d 子どもとの相互交渉のスムーズさ
- e 子どもとの相互交渉の楽しさ
- f 子どもへの身体的接触
- g 子どもへの関わりのリラックスさ
- h 子どもとの身体的遊び

②父親の育児参加

③父親と母親の子どもに対する感じ

父親と母親がそれぞれに子どもの気質の特徴をどのように受け止めているかを明らかにすることを目的とする。

④父親と母親の子ども性格の評定

ここでもやはり、父親と母親がそれぞれに子どもの気質の特徴をどのように受け止めているかを明らかにすることを目的とする。

⑤母親の実際の育児体験

母親が育児を肯定的に受け止めているか、否定的に受け止めているかを明らかにすることを目的とする。

Ⅲ 妊娠期の縦断的データの分析

Frodi & Lamb は、子どもをもつ夫婦に見知らぬ5ヶ月児が微笑む場面と泣く場面を含むVTRを視聴させ、その間の皮膚伝導係数を測定したところ、夫婦共に泣いている乳児を見た場合に係数が上昇するが、微笑んでいる場合にはその様な変化は見られないことを見出だしている。このことは男女のいずれも乳児の泣きに対しては情動が喚起されるが、喚起される量的なレベルにおいては性差のないことを見出だしている。このように血圧や心拍などの生理的反応は情動、特に否定的な情動の指標として有効なことを示している。さらに、彼等は8歳と14歳の男女児を対象に同様の手続きの実験を行い、同様の結果を得ている。これらの結果は、乳児の情動に対する生理的レベルの反応には親となる経験の有無や年齢差とは無関係であることを示している。一方、Feldman & Nash は6ヶ月から11ヶ月までの子とその母親のいる部屋にいろいろなライフステージの男女が同室した場合に、子どもにどのような行動をするかを観察した結果、子どもを持つものの方が、妊婦や子どもを持たないものよりも多くの反応を示すことを見出だしている。ただし、子どもを持つものについては有意な年齢差と男女差がないことを示している。前者と後者では手続きおよび分析の指標に違いがあるため、結果を単純に比較することには危険がある。しかし、子どもの姿を直接的あるいは間接的に見るという状況とは関係なく、性別を越えて同じような情動と行動を示すことが明らかとなる。これらの結果から妊娠期にある夫婦が、胎児および新生児に関するビデオフィルムを視聴した場合、妊婦とその夫が同じような情動体験をもつことが仮定される。

そこで、胎児及び新生児に関するビデオフィルムを心拍計を装着して妊娠期の夫婦が同時視聴することによって、胎児及び新生児に対する情動を生理的反応としてとらえることを意図してビデオフィルムを作製する。ビデオフィルムの内容の決定に当たっては、視聴するものが胎児や新生児に対してネガティブな感情体験を持つような物とならないように配慮する。

ビデオフィルムの内容が胎児や新生児に対してどのような感情を呼び起こすものであるかを検討するために大学1年生の男女各50名を対象として初期用および中期用ビデオフィルムについて視聴した後の感想を自由記述により求める。その結果、初期用のビデオフィルムの視聴後の感想として最も多いものは、「生命への畏敬の念」と表現するに相応しい内容のものである。つまり、1つの生命が生まれる確率を射精された精子の数から単純に考えた場合にも数億分の1にすぎないと言ふことの確認、さらに、数億個の精子の中から受精にたざさわる数少ない精子が選ばれるための巧妙な自然のメカニズムに対する驚異がその主たるものとなっている。妊娠と直接係わっていない大学生にとっては、未来の我が子への思いよりも、自分自身の存在の意味を確認する内容が多くなっている。また、中期用のビデオフィルムに関する感想としては、「あかちゃんも一人の人間なのだ」とい

う事実へのポジティブな驚きが最も多い。このような感想の元になっている視聴体験として、新生児が有している五感の機能の確認、胎児期の聴覚的刺激に対する新生児の記憶能力をあげている。このことからいずれのフィルムも胎児及び新生児に対してポジティブな感情を引き起こす内容であることが明らかとなる。先の、Frodi & Lamb や Feldman & Nash の結果から妊娠期の夫婦にも大学生にみられたと同様の視聴効果を期待できるものと仮定される。

妊娠期の夫婦に対しては単に視聴後の感想だけでなく、映像のそれぞれの内容に対してどのような情動を体験しているかを見るために、視聴時に心拍計を着装し、心拍の測定も同時に行う。さらに、映像としての胎児や新生児に抱いた感情が妊娠の経過や胎児や我が子に対していただいている期待とどのように関連するかについて検討する。

まず、ビデオフィルムの内容について概略を記す。ついで、大学生の2種のビデオフィルムに対する感想について概略する。最後に妊娠期の夫婦の感想についてみる。

1. 刺激用ビデオフィルムの内容

(1) 初期用ビデオフィルムの内容

所要時間：21分40秒

内容構成：大きくは9種類の内容で構成されている。

内容の概略：膣内への射精から4ヶ月頃までの胎児の発達の状況が動的な映像として構成されている。映像の解説は『数億の精子のマラソンレースの開始』などと言うように受精までの記述がやや擬人化された表現でなされている。特に、この映像の特徴は、視覚化されにくい膣内への射精から受精までの過程および胎芽・胎児が母胎内で生活する姿として映像化されていることにある。

なお、映像はNHKで放映された映像を研究の趣旨に合うように編集したものである。内容と所要時間は以下に示す通りである。

1) 膣内への射精から凝結・子宮に入るための膣内での精子の自然選択に関する映像 (所要時間 4分20秒)

①膣内への射精 (所要時間 53秒)

②凝結 (数億の精子のマラソンレースの開始・精子の自然選択の第一関門・精子の4分1が死亡等の解説あり) (所要時間 2分42秒)

③膣内での精子の自然選択 (精子の自然選択の第二関門・膣内の細胞を卵子と間違えたり、白血球に食べられる精子等の解説あり) (所要時間 44秒)

2) 精子の子宮口の通過に関する映像 (子宮での精子の自然選択の第三関門・方

- 向を間違える精子・押し合いへし合い進む精子等の解説あり) (所要時間 1分42秒)
- 3) 卵管内の構造等に関する映像 (所要時間 1分00秒)
 - 4) 卵管内の精子の自然選択に関する映像 (繊毛に逆らって進む精子等の解説あり) (所要時間 1分18秒)
 - 5) 受精等に関する映像 (所要時間 2分 3秒)
 - ① 卵子へ辿り着いた精子 (所要時間 33秒)
 - ② 卵子の壁を突き破ろうとする精子 (所要時間 10秒)
 - ③ 受精後の卵子の回転 (生命の踊り・3億の精子のマラソンレース等の解説あり) (所要時間 1分20秒)
 - 6) 受精卵内の精子に関する映像 (所要時間 1分50秒)
 - ① 受精直後の受精卵内の精子 (所要時間 45秒)
 - ② 精子から放出される遺伝子 (精子の劇的变化等の解説あり) (所要時間 1分50秒)
 - 7) 卵管内を通過する受精卵に関する映像 (所要時間 3分15秒)
 - ① 受精卵の細胞分裂 (細胞は激しく暴れ回っている・受精後4日までの自然のドラマ等の解説あり) (所要時間 2分55秒)
 - ② 卵管内を通過する受精卵 (受精卵の60%が死亡する等の解説あり) (所要時間 20秒)
 - 8) 子宮内の胚と胎芽に関する映像 (所要時間 4分00秒)
 - ① 胚の着床 (所要時間 36秒)
 - ② 1ヶ月頃までの胎芽 (腕や目の兆し等の解説あり) (所要時間 54秒)
 - ③ 2ヶ月頃までの胎芽 (0.6~6cmの体長の変化, 体重, 手の動き, 手の指や足指の様子等の解説あり) (所要時間 1分40秒)
 - ④ 2ヶ月過ぎの胎芽 (静止映像から構成) (所要時間 50秒)
 - 9) 子宮内の4ヶ月頃の胎児に関する映像 (子宮内の生活する胎児, 胎児の呼吸音, 臍帯, 物を見る能力がある等の解説あり) (所要時間 2分10秒)

(2) 妊娠中期の刺激用ビデオフィルムの内容

全所要時間：17分10秒

内容の構成：大きくは13種類の内容から構成されている。

内容の概略：母胎内で生活する胎児の姿が動的な映像でとらえられているとともに、出産後間もない新生児の能力、特に、運動・視覚・聴覚・味覚・嗅覚・社会的コミュニケーション能力などに焦点が当てられて映像は作られており、映像の中心は出産後間もない新生児の能力におかれている。

なお、映像はNHKで放映された映像を研究の趣旨に合うように編集したものである。内容と各所要時間は以下に示す通りである。

- 1) 出産場面および出産直後の母と子の様子に関する映像 (所要時間 1分27秒)
- 2) 新生児の運動能力に関する映像 (所要時間 51秒)
 - ① 1日目の新生児の原始歩行 (所要時間 28秒)
 - ② 1日目の新生児の把握反射 (所要時間 28秒)
- 3) アメリカの公園で母子がくつろぐ姿 (所要時間 13秒)
- 4) 新生児の視覚的能力に関する映像 (生後2日目の新生児の追視能力) (所要時間 41秒)
- 5) 新生児の聴覚的能力に関する映像 (生後2日目の新生児の聴覚定位能力) (所要時間 37秒)
- 6) 新生児の味覚に関する映像 (生後2日目の新生児の砂糖水の濃度に関する判断能力) (所要時間 1分28秒)
- 7) 新生児の嗅覚に関する映像 (生後5日目の新生児が母親の乳の臭いを識別する能力) (所要時間 1分10秒)
- 8) 胎児の超音波映像に関する映像 (所要時間 2分36秒)
 - ① 超音波診断と母親 (所要時間 1分06秒)
 - ② 胎児の超音波画像 (指しゃぶり, 舌だし, 呼吸様の口の開閉, 目玉の動き等の解説) (所要時間 1分27秒)
- 9) 子宮内で聞こえる音に関する映像 (所要時間 1分45秒)
 - ① 母親と産科医の会話を胎内で録音したものの再生 (所要時間 28秒)
 - ② 再生音とそれに関する説明 (所要時間 1分45秒)
- 10) 母胎内の血流音に対する新生児の反応に関する映像 (所要時間 1分51秒)
 - ① 2日目の新生児の反応 (所要時間 27秒)
 - ② 3日目の新生児の反応 (所要時間 29秒)
- 11) 母親の声への新生児の反応に関する映像 (3日目の母親, 男性, 無意味音に対する反応) (所要時間 1分31秒)
- 12) おむつ, 入浴, 授乳などの日常的世話に関する映像 (所要時間 47秒)
- 13) 母と子の遊びに関する映像 (所要時間 37秒)

2. 大学生によるビデオフィルム視聴の感想

(1) 方法

- ① ビデオの視聴は, 2回に分けて行う。第1回目は妊娠初期用のビデオを視聴し

1週間後に中期用ビデオを視聴する。

②ビデオ視聴に際しては、目的については特に説明を加えず、視聴後に感想を文章で提出するよう指示する。

(2) 対象

教育学部に在籍する1年生（平均年齢18.7歳）

男子 50名 女子 50名 計100名

(3) 結果

1) ビデオフィルムに対する感想

①妊娠初期用

映像的に見た場合、受精のメカニズムに関するものが全体の4分の3程の15分29秒を占めているのに対して、胎胚・胎芽・胎児に関する映像は6分11秒と時間的な意味からは偏りのある構成になっていることもあり、ほとんどの感想は受精に関するものとなっている。また、過去において学校教育の中で生命の発生や性教育について教育を受けてきた経験をもってはいるが、それらは必ずしも彼等が求める内容とは一致しないものと受けとめられており、生命の誕生に関しては必ずしも十分な知識を持っていないのが現状であることを示している。

このような背景をもつものが本ビデオを視聴した感想として、「生命誕生のメカニズム特に自然の淘汰機能」について、「今、自分がここに存在することのその確率の低さに基づいた不思議さ」等に関するものが多い。これは、視覚的に膨大な数の精子の具体的な動きを描き出した映像の効果によるものと考えられる。その驚きは、単なる知的な驚きにとどまらず、生命に対する愛しさ、今自分が存在することへの感謝と言うような情動を引き起こすものとなっている。さらに、これらの感想は同一個人にとって必ずしも別々なものとしてではなく、共通する体験として受け止めているものが多く、約81%のものによって述べられている感想である。また、自分が新しい生命を生み出す機能を持った存在であることに對して肯定的な感情を覚えたとするものもある。

胎児に関しては、妊娠初期の胎児について具体的なイメージを持っているものが少ないこと、また、妊娠中絶が妊娠初期に多くなされている状況から勘案して、妊娠初期の胎児に人間的な感情を感じていなかったとするものが多く、妊娠初期の胎児が指先を動かす映像や心臓の鼓動の様、外見的な人らしさから中絶と避妊の問題を考え直したとするものが多い。

生命尊重という問題はややもすると理念的なレベルで終わってしまいやすい面をもっており、また、生命と性の関連も具体的な生活のレベルで語られる場が少ないと言うこともあって抽象的な取扱を受けてきた課題と言える。本ビデオでは、いずれの問題に対しても具体的なリアルな情報が呈示されているために、視聴者の側に大変肯定的な感情を喚起し得るものとなっている。

②妊娠中期用

身近に乳幼児など幼い子どもがほとんどいない青年にとって、新生児がもっている外見的な頼り無さはそのまま新生児そのものの人間的な頼り無さとして印象づけられている。その様な青年達にとって本ビデオフィルムは、新生児に対するイメージを一新する機会を提供するものとなっている。

ビデオ視聴の感想の中で最も多く認められる記述は「赤ちゃんも、一人の人間なのだ」という純粋な驚きである（100%）。そのような感想は次のような事柄を知ったことによる。生まれて間もない新生児の五感が完全に働いているだけでなく、記憶と言うような高等機能が既に胎児の時から働いていることが実験的に呈示されることによって、言葉としてだけでなく実感を伴って赤ちゃんも自分達と同じ一人の人間なんだと理解したとするものが多い。さらに、赤ちゃんは単に『かわいい』だけのものではなく、また、『人形のように外から働きかけられる』ものでもないこと、赤ちゃん自体が独自の意思をもった存在であること、無能な生き物ではないことの発見を指摘している。また、外界の音が子宮の内部に伝わっている事実、そのことから家庭の在り方、父親の在り方に思いを馳せているものもある（特に男子に多い）。そのことによって胎児が外の世界と繋がりを持った存在であることの確認をしているものもある。赤ちゃんが人間に育つのではなく、赤ちゃんは人間なのだと言う発見をしているものもある。

いずれのフィルムの感想においても、特に顕著な男女差は見出されなない。この結果は、男女差がないとする Frodi & Lamb や Feldman & Nash の結果と一致するものとなっている。

3. 妊娠の経過とビデオフィルム視聴の感想

妊娠の初期（3・4ヶ月時）、中期（7・8ヶ月時）の2回家庭訪問をし、妻と夫に刺激用ビデオフィルムの同時視聴を依頼する。視聴後、初期には5項目、中期には8項目に亘る面接調査を行い、回答はすべてテープレコーダに録音する。

（1）対象の属性

研究協力の依頼は、市が主催する第一回目の母親学級に参加（妊娠初期）したもののうち、第一子を妊娠中の母親を対象に研究の協力依頼状を配布し、口頭で説明する。会場で承諾がとれたケースはほとんど皆無である。それは、夫の参加を条件としたことにもよる。回答は葉書を配布し、返送を依頼する。断りの回答がきた以外の未回答の家庭に電話をかけ、協力を再度依頼する。協力率は10%に満たず非常に低いものとなる。これは研究期間が比較的長いと言うことと家庭に入り込んで妻だけでなく、夫の協力も依頼するという煩わしさなど手続き的な繁雑さにも起因するものといえる。妊娠初期からのデータは30家庭の協力を得ることになる。しかし、転勤、長期出張、病気、協力辞退など種々の理由によりデータの一部を欠いているものが多い。本報告では妊娠初期からのデー

タが揃っている13家庭を分析対象とする。対象者の属性を以下に示す。

1) 妊娠初期における対象者の平均年齢及び結婚継続年数

夫……………28歳7ヶ月

最多年齢：34歳

最少年齢：23歳

妻……………28歳0ヶ月

最多年齢：32歳

最少年齢：24歳

平均結婚継続年数…1年4ヶ月

最多年数：7年3ヶ月

最少年数：2ヶ月

2) 家族形態

核家族46%，拡大家族54%

3) 夫婦の職業

夫……………会社員 46.2%

公務員 53.8%

妻……………会社員 30.8%

公務員 38.5%

無職 30.8%

(3) 妊娠期の夫婦の感想

ビデオフィルム視聴後の感想は、初期用フィルムについては5項目、中期用フィルムについては8項目について質問することにより聞き取り調査を行う。質問の順番は一定せず、回答者の内容に併せて適時変更する。また、回答者の順番も予め指定せず、夫婦の自由とする。ただし、夫婦のいずれか一方の回答のみで終わる場合は、他方に回答を促すような発問を行う。

1) 妊娠初期用ビデオフィルムの感想

視聴後、以下の5つの内容について面接により聞き取り調査を行う。

- 1 類似の映像に接した経験
- 2 内容に関する既情報
- 3 印象的な画面
- 4 我が子への思いの変化
- 5 入手したい情報

①類似の映像に接した経験

まず、類似の映像を視聴した経験の有無についてみると、妻の場合は類似の

映像を全く見たことが無いあるいは見たような気がするけど内容的には全く記憶がないとするものが46.2%，写真などの静止画像で見たことがあるとするものが15.4%，見たことがあるとするものは38.5%である。一方、夫の場合は見たことが無いとするものは61.5%，静止画像で見たとするものは7.7%，見たことがあるとするものは30.8%であり、情報に接する機会は妻の方が多くなっている。以前に映像に接した場所としては夫婦共に学校の授業とするものが多く、妻の場合は母親学級で見たとするものもある。このことから、妻においても夫にとっても刺激用の映像は、映像としての新奇性をかなり有していたものと言えよう。

②内容に関する既情報

今回、視聴した内容で既に知っていた情報にはどんなものがあるかを見ると、かなり知っていたとするものは妻30.8%，夫9.5%，半分くらい知っていたとするものは妻30.8%，夫23.1%，ほとんど知らなかったとするものは妻38.5%，夫69.2%である。つまり、妻の場合は半数以上のものが知識として知っている内容であったとしている。しかし、今回映像を見ることで知識として知っていたことの具体的な意味を確認することができたとするものが多く、いわゆる知っていることが今回のフィルム視聴によって理解が図られたとしている。その意味からは情報的にも新奇性をもった内容であったといえる。既に、知っていた内容としては妻の場合は胎児の成長・発達に関することであり、夫の場合は受精とするものが多く、知っている内容が夫婦によって明らかに異なっている。

③印象的な画面

次に、どの様な画面が最も印象的であったかについてみる。複数の内容を指摘するものもあるため、比率の合計は100%を越えている。『女性の膣内に射精された数億という精子が、巧妙な自然の選択段階を通過して最終的にはたった1つの精子が受精するまでの自然淘汰の過程』と『受精卵の6割が自然淘汰される』というナレーションを含む映像の部分を最も印象的であったとするものが多く、妻では86.6%，夫では76.9%となっている。ついで、妻の場合は、映像化された受精の過程が自分の身体の中で実際に行われた結果として『今、妊娠をしている』という事実に対して感動的に受け止めているとするものが23.1%である。夫の場合は胎児の成長、特に妊娠初期に胎児の身体の1部の運動が可能となるなど、『胎児の成長の速さ』に驚きを感じるとするものが30.8%ある。妻の場合は胎児の成長についてあげるものは、15.4%である。妊娠期の夫婦の映像に対する印象は、先の大学生の結果と同様の傾向が認められる。

④我が子への思いの変化

フィルムの視聴によって我が子への思いが何か変わったとするものは、妻では76.9%，夫の場合は46.2%である。かれらは、フィルムを視聴することで我が子への愛しきが増すとしている。具体的な指摘を見ると以下の通りである。

< 妻の場合 >

- a この映像を見るまでは、(胎児の姿が) まだ目に見えないので特に赤ちゃんのことを思うことは無かったけれども、(胎児が) 4カ月でもう口をぱくぱくしているかと思うと、よく寝そべて本など読むのでお腹の赤ちゃんを圧迫しているんじゃないかと思えた。
- b 最初は『ちゃんと生きているんだろうね』とか『ちゃんといるんだろうね』とか、『これでいなかったら大騒ぎして皆に収集つかないよ』とかいっていたけど、『まあ、先生がいるっていうからいるんでしょうね』という感じだった。でも(フィルムを) 見るとね、やっぱり『お腹の中で子どもだけ動いているんだなー』と思うと『あー』と思うし、あと『目とか鼻とかできている』と思うとね、人間になってきたなと思う。
- c 私は(フィルムを) 見た方が、実感みたいな感じで、『ああやって口動かしたりしている』の見れば、やっぱり見たほうが良い。
- d 直ぐに出来てしまったので、子どもができるのって結構簡単なんだと思っていたんだけど、今の映像であれだけの中のたった1つの精子、それもちゃんと着床するかどうかという、いろんな危険があって漸くできた本当に、命ですから、今までよりもずっと重い思いというのが強くなりましたね。
- e 抽象的には愛情という面において(変わった)、こんな神秘的な生まれ方をしているんだから大切に愛情を掛けてやらなければならないという面でのプラスということはあるけど、具体的にどうこうということは、まだ月数も少ないのでわからない。育児を実際にやってみるとどうなるかわからないけど、印象的に素晴らしい世界ととらえられる。
- f 今の映像もそうだけど、胎児の映像を見せてもらって(病院で)、妊娠が分かった頃は、妊娠に対して余り肯定的感情をもてなかった。今度すごく(赤ちゃんを) 欲しくなったと言うのが正直な気持ち。
- g ただ頭の中でこうなのかな、ああなのかなと思うのと、全然違うんですね(映像をみると具体的に胎児の姿を思い描ける)。

< 夫の場合 >

- a 4ヶ月っても分からんでしょう。でもこれみると人間の形していて、変なことでき無いなーと思った。
- b 私らの場合ぽっとできたという感じなんですけど、ビデオを見ると結構大変なんだなーという感じですね。
- c 大事にしなきゃあとと思いますね。あれ見ると本当に、見なければこういうのは分かりませんからね。
- d 大変な思いをしているというか。希にしかできないというか、奇跡的なという点に関しては深く感じる。何でもかんでもできちゃうというのではなく、非常に

奇跡的な部分と言うか尊厳な、非常に大変な……。

- e すごい（映像を見る効果が）あると思う。今見た段階でもこういう状態になっているんだな—とか、余り無理もさせられないな—とか、気をつけてやらんきゃいけない—と、風邪もひいているからね。果たしてどういう影響があるのかな—と思った。

一方、映像を客観的な情報としてとらえているものは、夫に多く、その具体例を以下に示す。

- a まだ実感がない。映像で見たことは学校でならったことと同じだと思った。出てきて（生まれて）はじめて感じるのではないかと思う。
- b 自分の子どもが出ている（映像として）わけではないから、見たか見ないかでは変わらないと思う。
- c （映像を見ることで）特別に変わるというところは無いと思う。だけど育つ過程を見ることで、『あ—こんなに頑張っているのかな—』と言う思いはわく。見たことで（胎児への）愛着がわくということはない。映像をみて『愛しい』という感情はあまりわからない。ちょっと距離がある感じ。客観的に見てしまう。
- d フィルムを見ることで彼女のお腹の中にいる自分の子どもに対して気持ちが変わると言うことは無いですね。別にお腹の中で育っている子どもの姿を見ても変わらないですね。それでどう変化すると言うことは無いですね。
- e 私は（映像を見ることで）余り変わらないと思う。あ—今こういう感じかというところですね。
- f 私は（映像を見ることで）そんなに関係ないと言うか、僕はやっぱりもう少し大きくなって手で触ったり、耳で聞いたり、直接感じられるような存在になってこないと愛しさは未だわいてこない。映像みることで子どもって大変なんだな—って、愛しさと言うものとは違うものを感じるけれども、自分の子どもということにはならない。……もっと時間がたつと違うと思うんですよね—。他の人の子どもの話を聞くのも楽しくなってきますし、そういうのは有りますね。しかし、映像を見ることで愛しさが深まると言うことは無いですね—。

妊娠初期の頃は妻自身もつわりがあることで、おなかの胎児を確認するというものが比較的多く、胎児の存在を直接的具体的に確認できない時期であるだけに、妻の多くは一般的な胎児の映像であっても客観的に映像として確認することで我が子としての胎児に肯定的な感情を般化している。一方、夫の場合は映像と我が子としての胎児に同じような感情を体験するものと映像としての情報はあくまでも1つの情報として客観的にとらえているものに別れている。

⑤入手したい情報

妊娠初期について、情報を得たい思っているものは夫婦とも非常に多く、いずれも92.3%を占めている。どの様なことについて知りたいと思っているかを見ると以下の通りである。

< 妻の場合 >

- a 保健所からもらったパンフレットの情報は、一昔前みたいな物になっている。
- b 『陣痛になったらどうしよう』とか『先に病院にいったほうがいいんだろうか』とか『陣痛になったときに苦しくて電話も掛けられなかったらどうしようか』とか『もし一人の時にそうなったら困っちゃうな』とか思ったりしてね。……まだつわりとかが、おさまりかけている時期だからつわりで苦しいなということだけで一杯で、何を食べてらいいのかとかいうこと。
- c どういう時期にどういうのができているか（胎児の発達）というのを教えて貰えれば……。自分で教科書を開いたりすればいいんでしょうけど、なかなかそこまでいかないので。そういうの教えて貰えれば、カルシウムだとか小魚だとか骨とかそういうのに、本人が気を付けるようにしていますけど、より強く自覚されるのではないかと思う。
- d 結構つわりがきつくて立てなくて、いろいろやってもらって、今日は気分が良いほうで、そういうとき皆こんなもんかなという安心する材料として、資料があるといいと思う。
- e 今一番の不安は出産ですので、後期の胎児の様子から出産までの胎児の様子（を知りたい）。出産が一番不安です。
- f お腹に赤ちゃんが居る前にこう言う映像を見たいと思う。こう言うことは結婚の有無に関係なく身近にしたほうがよいと思う。結婚すると『お子さんまだ』というように日常的な場面にセックスが語られるようになり、そのギャップに驚かされたので、もっと日常的にしたほうがよいと思う。不妊なんかに対してもメカニズムよりも神頼みになっている部分がある。一般的に性に関して無知すぎるように思う。もっと教育される必要がある。
- g 学校では『性器教育』しか受けてこなかったもので、命の尊さまでは学べなかった。高校生位になったらこのくらい深く教えたら、女性ももっと自分の体を大切に思うし、命に対しても尊重するようになると思う。この間も助産婦さんが、子どもが出来ても喜びを感じられないというか、子どもの存在を受け入れられない人が結構いるというんですね。精神的なものだと思うんですけど、独身のときからもっとそういう場があったらいいと思う。自分が今知りたいのは、もっと現実的な栄養のことで、例えば貧血になりやすい、鉄分は吸収されにくい、じゃあどういふふうに食べ合わせたり、工夫すればいいのかなど具体的なことを知りたい。

- h 肥っているのですどの位大きくなるか心配している。お医者さんに肥るなっているわれている。
- i つわりだといわれてもその状況がよくわからない。また風邪をひいたけれども、病気とのかかわりなどもよくわからない。病院にいったら妊娠中でも大丈夫な薬があると言われるけど、そういうのかかわりとかもうちょっと知りたいと思う。母親と一緒に暮らしているので体を大事にしてくださいといわれても、どこまでが大事でどこまでが病気でないのかそこらへんがね、私にとってはせつないんですよね。気持ちの問題と言うか、仕事もしているし、例えば、しゅうとめさんと一緒ならそんなに寝てられ無いといわれても、具合悪いのは悪いんだし、自分の体のことについてもっと知りたいと思った。
- j こう言う風になると楽になるとかいろいろ弛緩法を習ってきたけど、どういう姿勢をとると赤ちゃんがどういう風に苦しい態勢になっているかが、映像で見ることができると気をつけ方も違うと思う。周りの人が『大丈夫?』というけど、自分が苦しくないものだからそんなに大事にしすぎるのもと思うし。自分が前屈みになったときに赤ちゃんがどういう姿勢になっているとかそういうのが見れるとよいと思う。スイミングなんかもどれぐらい良いのかと思う。前にお母さんが苦しい姿勢をしているときは赤ちゃんも苦しんでいるし、お母さんが楽なときは赤ちゃんも楽な姿勢といわれたが、いまひとつ納得できない。
- k 本には一般的なことしか書いてないので、読んでいくと全て自分に当てはまって、『お腹が痛む、出血がある場合は、流産だとかありますよね』そうすると『あー、この痛みはそうなんだろうか』とか、『この吐き気はそうなんだろうか』とか、不安だったらいつでも電話くださいと言われるけれども、実際に電話した場合、親切に答えて貰えるのかなと思うと、あそこの病院は間違いだったと思いますしね(笑い)。個人差があると言いますし、近くにいる友達に『こうなんだけど、あーなんだけど』といっても、その人達は私を不安に陥れないために『大丈夫』と気軽にいうので、言われたときには『そうだ、そうだ、大丈夫だ』と思いますけど、あとで『でも私の場合は違うかもしれない』と思いますから。だから何が欲しいのかと言われたら何が欲しいのか良く分からないんですけど、絶対大丈夫と言う確信というか、見せて貰えれば、自分の今の状況をもっと適確に何か…お医者さんがカルテに書くこと全部言ってくれればいいけど、ただ結果だけ『大丈夫です。順調です。』といわれるけど、どういうふうに順調なのか良く分からない(笑い)。聞けば言いのかもしれませんけどね。だからそういうところが、一対一と言ったらなんか、おかしいんですけども、それぞれにあった…精神的なことをもっと、そういう指導をしてほしいな—と思います。(Q超音波で胎児の映像はご覧になりましたか) 最初のときに、9週の頃見せてもらった。『これがそうだよ』とかいわれて、『あーあ、分かるなと思って、頭とか。』その後、心音をき

いて、その後、見せてもらっていない。あの時は確かに居たけど、今はどうか分からない(笑い)。心音も私にはどれが心音なのか、雑音なのか分からないんですよ。他の人の(胎児の)心音がやたら大きく聞こえて、(自分の胎児の心音が)小さいと思えて、ひょっとしたら虚弱児かも知れないかと思って。そういうのもっと気軽に聞かればいいなと思う。

< 夫の場合 >

- a つわりの状態について
- b 何時妊娠したか分からないのでね。こうこうことを知りたいと思う。外界からの刺激、精神的な影響も含めて分かれば良いと思う。転ぶとかね。叩くとかね。そういうことで胎児への影響が分かれば。心因的なことでは母親が、ドッキとしたときとか、疲れることの影響とか。あと、働いているわけですから医学的情報だけでなく24時間とか週単位のお腹の中へ及ぼす影響などについて知りたいです。 (今は) 自動車にのって通勤しているなど妊婦さんの生活状況が昔とは随分違っているので、今の生活に即した情報が欲しい。友達の妊婦さんの話では『車を運転していてヒヤッとしたとき、お腹がかたーくなったので、そのあと車に乗らないようにしたけど、お宅の奥さんはどうするの』と聞かれた。そういうのについてもちゃんとした情報が欲しい。
- c どんなものを食べたら良いかということがはっきりしていないので、只お腹が大きくなったような。でも実際にはいろんな栄養素がある訳でそういうのが知りたいですね。(Q 具体的には?) 例えば、牛乳とか、カルシウムとか、うちではレシンを飲ませているんですけど、レシンなど良いと本にでていましたので。そういうのとか、あとカルシウムなんかでも牛乳のカルシウムでなく、カルシウム錠剤とかありますよね。何かでとったほうがいいのかとか。2種類くらいありますよね、牛乳飲んだほうが良いというのと、牛乳のカルシウムは人間に吸収できないとかありますよね。そういうのどっちが本当だというの。
- d (妻のつわりの状況に対して) あちらこちらから入院したほうが良いんじゃないか、というようなことを聞かされ、環境かわると少しよくなるとか、入院してゆっくり休むとよくなるとか話は聞くんですけど、どうかかなと思うし、個人差もあるし、入院して10日間で全くよくなったよという話も聞くし、だけど時期的によくなったのか、本当によくなったのか、本当に入院するとつわりって良くなるものなのか。1番重かった時期には本当に入院したほうがいいのかかなと思ったし、判断材料が無い。これからどう成って行くのかという。その辺がちょっと心配でした。彼女のお母さんがやっぱり重くて、そんな話をちょっと聞いていますから心配にはなりました。
- e 日常的な子育ての知識で、1歳半位までを知りたい。(Q胎児よりも生まれた後のことですか) 生まれた後のことのほうが知りたいですね。来年生まれたらど

- うやってやるのか、多分（妻に）まかせっきりになると思いますけど。
- f 時間的なものでしか変化を見ることができないので、今母体にとって大事な時期なのか、赤ん坊にとって大事な時期なのか、両方大事ですから両方にとってどういう時期が大切で、その時に何かが起こったときにどうなるかと言うことが分かれば知りたい。病変的なことも。
- g 子どもが自分の妻の体にどういう影響を及ぼしているのかということと子どもの成長、いま見たようなものも有ったほうが言いと思う。初産だから流産と言うことが一番心配だし、こう言う時期には、子どもがこのくらいの大きさになっていて、無理ができないとか、そういうことが情報として有ればよいと思う。妻は母親学級に行ったりとか、病院にいったり細かく聞いてくるけど、夫と言うのはそういうのがないですし、そこに一緒に行って、超音波で見るわけでもないし、ただ自分の奥さんのお腹が大きくなるのを眺めているだけというか、それだけだから、妻の健康を考えちゃう。
- h （妻には妊娠に対して）物凄く不安があるんですよね。『どうするんだろ。どうするんだろ』と不安があるんですよね（Q例えば、どんなことですか）つわりになったとき体の変調を来すんですよね。母に聞いても人が通る道なんだとしか言わなかったもんですから、私自身も、はたしてこれがつわりなのか本当に具合悪いのかそのへんで、本人も悩んだんですよね。妊娠した時点であんまり嬉しそうで無かったので、不安ばかりつのっちゃって、本当にこいつ大丈夫かなというのが最初でね（Qつわりはかなりきつかったのですか）妹とかね、話きいてかなり強いのかになって印象受けた。見ていてもかわいそうな位でね。
- i 何ヶ月の時に脳ができるとか、食事、栄養の面で何が良いとかありますよね。最もそのときに食べられないんですよね。それで困っちゃうんですけどね。そんなのですよね。ちょっとは気をつけているんですけどね。
- j 彼女からここが痛いとか、訴えられてもよく知らないわけです。答えようが無いわけです、知識がないから。結果としてさすってやるしかないわけです。大丈夫だと口で言ってごまかすしか無いわけです。僕までおたおたすると尚更不安がるから。そういうとこまで看護婦さんや先生が教えてくれると言いと思う。マニュアルがあるといいと思う。僕に本を読め読めと言っても、僕が読まないから良くないんですけどね。彼女はよく勉強しているにもかかわらず、不安になるということは、今の情報が不足しているのだと思う。こう言う時期に、例えば、お腹が痛いのは別にどこか悪いと言うことではなくて、こう言うことが考えられるとか、そういうときは横になりなさいとか。或いは何ヶ月目に胎児が動くけれども1・2ヶ月ずれても心配することないとか。この間お医者さんについてきましてね。『胎児動きますか』と聞かれてね『まだうごきません』といたら、『そうかも直ぐ動くんだらう』といわれて、未だ動かないので、すごく心配して

いるんですよ。そういう医者という言葉非常に無責任だと思うんです（笑い）。患者が不安になるようなことを医者がはくようでは、医者は失格だなと思った。そういうところのお母さんの気持ちを不安定にさせないための情報がしっかりしていないと、こういう核家族では一人でもんもんとしてしまうんですよ。そういうこと分かって話してくれないと精神的に不安定になって悪影響を与える。これからの時代、核家族が増えてくるから、そういう意味のマニュアルというのがあっていいな—と思う。

妊娠初期には、妊婦自身の場合は自分の体調の変化に対する情報に対して1番要求が強い。夫の場合は妻の相談相手になりたいという思いがあるものの妻以上に妊娠の経過等について情報を欠いているため情報を望むものが多く見られる。核家族は約46%であり、半数以上のもは夫以外の家族と同居しているが、知りたい情報は家族の中では得られないものと思われる。妻の得たいとする情報の内容には特に家族形態との関係は認められない。しかし、夫の場合は、核家族の夫は妻の日々の不安にどう答え・どう対処するかの情報を得たいと望んでいるのに対して拡大家族の夫はそのような情報よりも胎児に関する情報を得たいと望んでいるものが多くなっている。

妻や夫が望んでいる情報は必ずしも情報として現代社会に欠落しているものではない。むしろ、情報の伝達経路あるいは情報のネットワークが情報を必要とする人々のところまで広がっていないことでせっかくの情報が活かされていない状況にあるものと考えられる。

3) 妊娠中期

VTR視聴後、次の8項目について聞き取り調査を行う。

- 1 類似の映像に接した経験
- 2 内容に関する既情報
- 3 印象的な画面
- 4 視聴することによる我が子への思いの変化
- 5 胎児に関して得たい情報
- 6 夫の立ち会い出産
- 7 父親が子どもを抱いている姿
- 8 育児分担

①類似の映像に接した経験

まず、類似の映像を視聴した経験の有無についてみると、妻の場合は69.2%、夫の場合は46.2%と妻の方が経験を持っているものが有意に多くなっている。妻も夫も母親学級や父親学級などに出席して見たとするものが最も多い。対象地域の父親学級の夫の出席率がほぼ20%前後であることを考えると、本対象者の参加率は69.

2%と非常に高い比率を示す。協力を得た過程からも明らかなことであるが、本対象の夫婦は育児に対して関心がかかなり高い人々であるといえる。ただし、父親学級で類似の映像を見たはずなのに、その比率が参加率よりもかなり低いのは『居眠り』『中座していた』などの理由による。

②内容に関する既情報

今回呈示したVRTの内容を事前にどの程度知っていたかについてみると、かなり知っていたとするものは妻23.1%、夫15.4%、半分くらい知っていたとするものは妻30.8%、夫7.7%、ほとんど知らなかったとするものは、妻46.2%、夫76.9%であり、類似の映像に接する経験の有無と同様な傾向が見られる。

印象的な画面についてみると、全員が画面の指摘を行っており、情報としては必ずしも新鮮なものでは無かったが、注意を喚起する効果が大きいものであることを示している。

次に、どのような画面が印象的に受け止められたかについて、具体的な回答例を示す。

③印象的な画面

妻および夫別に視聴した内容のどのような部分が印象的であったかについて得られた回答を内容別にまとめて記述すると以下ようになる。一人で2つの内容について指摘したものもある。

< 妻の場合 >

運動能力

- a 赤ちゃんのもって生まれた反射神経みたいなもんね、凄いなーと思いましたけどね。片手でこう体、支えちゃったりするのね。これは父親学級で見なかった。
- b 片手で自分の体重を支えたのは、あれはもうビックリ。あんなこと考えられないと思った。
- c 昨日、父親学級あったんですよ。割りと似たような画像があっただね。昨日の場合は、両手でねこう言う風にやってみましたけど、片手でも大丈夫なんですよー。
- d 生まれて直ぐお母さんのおっぱいにしゃぶりついたところ。

胎児の記憶能力

- a お腹の音（血流音）をきいたら泣き止むという、そんな話はよく聞くんですけど、ああいうふうに見て見るとやっぱりという感じですね。
- b 生まれてからお母さんが話しかけると反応するというのが……、今から話しかけてやらんきゃと思った。
- c 私は直ぐ泣き止む奴（血流音に対する新生児の反応）あんなに直ぐ泣き止んで、『本当？』なんか嘘ぽいような気がする。笑い。いや、そういう風には聞いていたけど実際にね、自分で持っていればね、そういうテープ、よく売っている

というでしょう。私、買っておこうかな。夜中に泣かれるとうるさいから。

子宮内に響く外界音

- a 子宮の中の音があんなに、人の話声がよく聞こえるなんてちょっと恐ろしいですね。あんなにはっきりとね。あれだけの音しるんだったら、しっかり聞いている訳ですよ。
- b 子宮の中にマイクを入れて……あれが……随分後悔をしてしまったと言うか、笑い。聞く能力があるのかなというか、私達が聞こえていても、赤ちゃん自身にも聞こえるんだろうね。笑い。それがねー。
- c 話し声がちゃんと子宮内に聞こえていること、血流音が聞こえるのは知っていたけど、ちゃんと話しているとか、喧嘩しているとかね、よく胎教といわれるでしょう。どれだけ効果あるのかなーと思っていたけど、今、言われる意味が分かったような気がする。

胎児の生活

- a 胎児が指しゃぶりをしている画面が一番印象的でした。ただ、赤ちゃんとしてよりも胎児としてのとらえ方のほうが強いから、今はもう毎日、お腹の中で引切り無しに動いているからお腹の中でもう指しゃぶりしたり、舌だしたりしているんだって。
- b 超音波であれ位ははっきり分かれば凄いですね。この間25週の時に逆子かも知れないというのでみて、ほらほらといわれてもよく分からなかった。ただザラザラしているだけで分からないのもっとしっかり説明してくれれば、ここが頭だよとか。たまたましてもらったんですけど……やっぱり、自分の体の中で動いているのが目に見えてくるというのは感動でしたね。あらー、指あるわと思いましたけど。やっぱり、実物よりもまだ世の中に出ていないのが、こうやって映像になるのが凄いですね。
- c 一回見ているので、そんなにびっくりしなかった。びっくりというよりも、一生懸命生きているんだなということが、何度、見ても今お腹に丁度いるので、超音波画像をみると嬉しくなる。

視覚

- a 何か30cm位が一番焦点が合うというのも、へえーて、そんな情報しらなかったから、半年位にならなきゃ見えないんじゃないかと思っていた。笑い。だから、それまでに、赤ちゃん、私、視力悪いんですけどね。見えなかったらどうするやーと思っていたけど、生まれて直ぐあれだから…、鍛え方によって目よくなるなかやと思って、笑い。

< 夫の場合 >

運動能力

- a 左手一本で自分の体重持ち上げられるのには驚いた。
- b 歩こうという意味を持っていると言うか、ちょっと支えてあげれば、自分で物を掴んで自分の体重を支えられると言うか、人間と言うのは一人で歩いていくもんだと言うそういうのは、他の動物と同じであるのかなーと思った。
- c 手でもって一人で体持ち上げたりなんかするのはね、能力、やっぱり有るんだなって。
- d 先ず驚いたのは、歩くのと、つかまってぶら下がる筋力ですね。

胎児の記憶能力

- a 血流音と心音で眠るところですね。
- b お母さんの心臓の音を聞いたら急に安心したような顔になりましたでしょうあれが何とも可愛くてあれが良かったですね。

子宮内に響く外界音

- a よくね、身近な人からお腹にいるところから聞こえるんだよということは、自分で分かっていたので、常に話し掛けていて、これはいいかったんだな、正解だったと思った。画面で見たときには、おーそうなんだなーと思って。改めて感心した。
- b まあ、僕らの話が聞こえていてね、彼が理解しているかどうかというのは問題が有ります。もし理解されていたら困るなーと思う。あんなに聞こえるものなんですかねー。だからね、あそこにむかって『おい』とかね、『元気で居るか』とかね、これあんまりやり過ぎると耳が聞こえなくなっちゃうんじゃないか、これはまずいなと思った。あんなに聞こえるというのはびっくりしましたね。あんまり、お腹の前でさわいじゃいけないんだなと思った。1つ不思議に思ったのは、血流音を聞くと泣いている赤ちゃんが泣き止むでしょう。あれは何時ごろまで続くんでしょうね。もうこのくらいになると（大人の意）、いやな音の部類に入りますよね。赤ちゃんというのは生まれてきたとき、器官の全てが完全に成長しているという訳じゃないんでしょう。部品としては完成しているんでしょうね。
- c それなりに、音を聞いたりとか、そうかなーと思った。
- d （胎児は）よく聞こえているんだよといわれるけど、本なんかでも、実際にこう見せられると、おーやっぱりそうなんだなーと、百聞は一見にしかずで、やっぱり思いましたね。
- e 話している言葉が聞こえるといっていたんだけど、本当なんだと分かった。

感覚能力

- a 赤ちゃんが匂いと音と色を見分けることがちゃんと出来ると言うのもはじめてですね。凄いと思った。
- b なんていったら良いのか。早いうちから感覚があるんだな—という。まあ凄いですね。
- c 赤ん坊が学習機能を持っていると言うところが、非常に興味深い。
- d これも一度見たことのあるフィルムで、赤ちゃんがこれから育っていくのに皆同じく、能力的には備わって出てきているわけでしょう。そのところで赤ちゃんの額がアップで写ったところがあったんですよ。そこんとこで、皆同じでね、生まれてきて、じゃあこれからこの赤ちゃんという風に育っていくんだろうという、そこが感動というかね、面白く見ました。あと、匂いとか、聴力はこの映像で初めて、もっと聴力とか視力は遅いものと思っていた。
- e 実験的に色を識別できる、匂いを嗅ぎ分けることができる、そういった基本的な動作が、感覚が既についているというのが、生まれて一日目で、ある程度出来てしまうと言うのが凄いな—と思った。味わうことね、5感がもう既に出てきていると言うね。それがまだはっきりしなくても、すでにその状態にきているというのが、凄いな—と思った。それが一番ですね。

その他

- a おっぱいのんでいる赤ちゃんの目の玉が白いですね。私は濁っているな—と、あとは聞いたこと有りませんでしたね。

印象的な場面としては新生児の運動能力、胎児の記憶能力、子宮内に響く外界音を夫婦がともに指摘している。さらに、妻の場合は胎児の生活についての指摘が多いが、夫の場合は感覚能力について指摘するものが多い。これらの映像を視聴することによって、夫婦がもっていた胎児や新生児に対するとらえ方を刷新するような効果を持っていたようである。子宮内に響く外界音を確認するための映像となったものは、子宮の中で録音したテープの再生音であるが、この再生音には母親の音声だけでなく、母親と話をする医師の音声も鮮明に聞き取ることができることを如実に示している。実際の生活場面で、妻の38.5%、夫の53.8%の者は、たとえば『主人なんかは、意識して話し掛けているみたいですけど、朝起きると何か挨拶しているし。わかるかどうかはあれだけど、一緒に懸命話し掛けています。』自分でもね、7ヶ月に入ってから『赤ちゃんも聞いていますから変なこと言わないで下さい』って、お医者さんに言われたんですけど。やっぱり、意識行くようになる—というか、ちゃんとした何—というか、『努力を持った人間がいるんだな—という感じで思うようになる。』と言うように、日常的に我が子である胎児に呼び掛ける体験をもって

いる。彼等は、今回フィルムを視聴する以前から体験的に声掛けと胎動との関係に意味づけを与えていたが、この再生音によって自分の解釈が正しかった確認したとしている。逆に胎児への声掛けという体験を日常生活の中で持っていないものにとっては、驚きとしてこの事実が受け止められている。その比率は夫婦共に30.8%である。日常生活の中で明確に確認できない事実を呈示されること、あるいは知識として知らされていることを具体的な生活の状態として呈示される情報は、妻にとっても夫にとっても注意を喚起する情報であることをこの結果は示している。

④視聴することによる我が子への思いの変化

VTRを視聴することで我が子への思いがどのように変化するかについて見ると、夫婦ともに92.3%のものがVTRをみることにより、胎児である我が子への思いがよりポジティブなものに変化したとしている。その内容を以下に例示する。

< 妻の場合 >

- a さっきみたいに、話かけなきゃいけないな—と思うし。見る効果はあると思う。
- b やっぱり見た方が、良いというか、良いと思う。でも、今みたいに聞こえていると思えば、喧嘩もしないとか、話し掛けてやるとかいう風にはしていることはしているんですけど、まあ時たま、でっかい声出してしゃべったり、喧嘩したりはしますけど、やっぱりちよっとはそういうことは……
- c 聞こえるといっても、何も保障がないでしょう。だから、ちゃんと聞こえているのかなって、思うけど、実際に聞こえるということが分かったので（話し掛けるようにする）
- d 喧嘩しなきゃいけないな—、お腹に響くな—と思ったりした。最初のころ喧嘩したり、怒ったりするとお腹に響くような気がしたことあったんですよね。最近はそういう喧嘩はないけどね、笑い。自分がカッとするとお腹痛いな—という感じはありましたけどね。その後あんまり喧嘩してないよね。やっぱり、悪影響になることはしてはいけないな—って。
- e 生まれてからの赤ちゃんの映像を見ておくと、人格として認めやすい、もう赤ちゃん扱いじゃなくて、一人の人格としていろんな意味で対応してあげなきゃいけないんじゃないかな—と凄く感じました。生まれたときにこういうこともできる、こういうこともできるということで。
- f 本みるとお腹の中も、7ヶ月の終わり位だから（胎児は）かなり大きいんですよね。変な感じ、笑い。生まれた途端にそれだけの能力あるんですよね—。もともと、ね—、大人になるというか、赤ちゃんというとなんか人形が入っている位に皆が扱っているでしょう。だから、そうじゃないな—という感じしますよね。
- g かなりあると思う。
- h 全然違うと思う。

i 見たほうが良いと思う。

< 夫の場合 >

- a 動物のことを思い出して見ていた。カバの赤ちゃんが歩くとか……。こういうのを見るとプレッシャー感じる。近いうちにこういうのが、ここに存在するようになるのかって。最近やっと手を当てて、(胎児の動きが)分かるようになったんですよ。そして(胎児が)いるんだな—と思うわけです。世の中にでてきたらどうしょう。期待と不安というか。未だ、ピンとこないですね。こういうのを見ると、お腹に子どもいないと、ふ—んとか、そうかそうかとか割りて人ごとみたいに見るけど、居ますからね—。もう直ぐ現実なんだな—と思いますね。これはやばいな。名前も考えなきゃいけないし、出生届はとかね、プレッシャーというか、現実感がありますね。
- b 今日から話し掛けます。まだまだ実感がない。やっぱり知っていたほうが良いですね。
- c かわるな。腹の中で聞こえるというのを見ると、な—も喧嘩はできないって感じで、なんまりあだけちゃいけんと怒んのもさよくないと思って、子どもに答えているんだなと思えば怒らんで良いでしょう。
- d それ(見る効果)は絶対あると思う。よく言うんですけど、イライラしたその気持ちでそのままいるなど。やっぱり、リラックスした気持ちでいて、よく話し掛けてやりなさいって言っている。本人はまだ分からないんじゃないのという感じもあるんだけど、そう思うんですよ。話し掛けてやったり、この間、お腹蹴っとばして、痛い痛いいうんだけど、私が、なぜなぜすると、ピタッと止まっちゃうというのがあるんですよ。笑い。(妻…お父さん怖いんだね。)怖いと思うと、子どもも怖いと思うから優しいんだよ—ってやりなさいって。(妻…不思議なんです。)不思議なんです。物凄い蹴っとばすのに(妻…蹴っとばすでしょう。それを知って貰おうと思って、主人が、手をこうしてもらったんですよ。)そ—とおとなしくなった。(妻…絶対でないかも知れないけど、不思議にね)でも不思議です。だから分かってくれているのかな—という気持ちもある。必ずなぜなぜすると。(妻…まあ、人が聞いたら笑うかも知れないけど、やっぱり、分かるのかな—という感じ。)それはあると思いますね。なんか、沈んでいるな—とか、学校へいって、沈んでいるな—と思ったら、くよくよしなさんなというんですよ。影響してくるから。何となくそんな感じは、自分でも受けますね。なるべく一緒にいてやって、話し掛けるようなこととしてやるし、大切なことなんだな—と思いますね。
- e 速く生まれてほしいと思いますけど、見たかぎりでは、やっぱり大変ですね。(Qどんなことが)世話が一番大変でしょうね。いろんな面で気つかわんといけ

- ませんから、やっぱり、母親の役割が一番大きいですわ。決まりですけどね。
- f 意識づけにはなるんじゃないでしょうかね。父親学級にも参加したいと思って
いたけど、仕事の関係で参加できなかった。
- g 大部違うんじゃないですか。話し掛けても聞いていると言う意識は大部強いで
すよね。これ見れば。だけど全然分からない意識で生活するのと本人に何等かの
影響があると言う、環境そのものが、音とか全てだけれども、まあ今の所は音だ
けしかないだろうけれども、環境全てが、結局、現実に影響していると言うこと
があるということは、それなりに考えなきゃいかんということになるんじゃない
ですか。ものすごく騒音が煩い所に住んでいけば、そういうことの何かの影響受
けちゃうと思うんですよね。年がら年中音が物凄く煩い、騒音、物凄く騒音ばか
りしているところに、それ皆聞こえちゃっているわけですから。それがその人間
にとって生きる上で影響あれば、えらいことだし、考えなきゃいけないとなるん
じゃないでしょうかね。
- h 今の画像は面白かったです。生まれた時に……、あー生まれたではなくて、何
となく、人格というのちょっとまだ頼り無いですけどね、生まれてもう、一人
の人間というか、そうでないと赤ちゃん、赤ちゃんで何にも、今みたいな情報が
無かったら、赤ちゃんは何も出来ないんだからみたいな感覚は、きつと持つでし
ょうね。今、見てそういう、確認できたというか、さっきもいいましたけど、何
時ごろからそういうことができるのかという話も見なければそこまで考えないと
思うんですよね。
- i 見たほうがいいねー。なかなか話だけじゃ、見ることは本当に良いと思うんで
すよね。目で見る方が、本で読んだり、人から話を聞いたりするのは違うと思
うんですよね。ビデオでいいんですけどね、生の実際の場面を見せてもらう必
要は無いけど、こういうものを父親学級なり、母親学級なりで見せても良いだろ
うし、情報として与えて貰えれば、本当に子どもに対する接し方も、手抜きじゃ
ないけども、わかっているなーと思えば、愛情の掛け方も違うと言うわけじゃ
ないですけど、気持ちも違ってくるんじゃないかなーと思う。
- j 凄く違うと思う。生まれるまで自分とは違う固体がいるだけという考え方とは
違うと思う。
- k 頭の中でわかっているつもりなんですよね。でも、殊更強調されるとなると呼
んでいいんだか分からなくまりますね。ただ、赤ちゃんと呼ぶんじゃなく、何々
くんとかよばなきゃいけないのかという気もするし、また、男として扱ったらいい
のか、女として扱ったらいいのか、お腹こうやって（触る）、はて何て呼ぼうか
なーと。話し掛けてやるといいとか、なんとかいうし、はたと困ることあります
ね。（Qなんと呼び掛けられるのですか）名前がきまっていないもんですから、
よしよしですませている。気持ちが通じて欲しいんですけどね。

日常生活の中では目にしにくい胎児の生活する姿や新生児の感覚能力などを実験的に顕在化し、映像として呈示することにより、現実の夫婦の生活と胎児や新生児の生活の繋がりを確認し、その結果として自分たちの生活を見直そうとする傾向が認められる。さらに、育児文化として体験的に『胎教』ということがいわれても、その効果を確認することは日常生活の中では難しいことであり、今一つ、納得がゆかないという感じをほとんどの夫婦が抱いていたが、今回のフィルム視聴を通してその点に関して納得できたとするものが多い。多くのものは改めて自分たちと胎児が同じ空間に生活していると言う事実を確認しているものが多く見られる。また、胎児や新生児に人間として愛着を覚える体験をしているものもある。このように胎児や新生児に関する情報は妻にとっても夫にとっても等しく注意を喚起すると共に実際的な生活レベルへの取り込み効果も期待されるものであることが明らかとなる。しかしながら、妊婦に対しても妊娠および育児情報が旨く伝えられるネットワークが確立されていない現在、夫への妊娠育児情報の伝達量はさらに稀薄なものとなっている。それゆえ、適度な情報が夫にも提供されれば、夫自身による育児参加の可能性が示唆されているにもかかわらず、結果として夫が育児場面から排除されてしまう状況が構造的にも作り出されていることを今回の結果は示唆している。

⑤胎児に関して得たい情報

胎児に関する情報として何か必要としているものが有るか、否かについてみると、夫婦共に約77%のものは特に知りたい情報は無いとしている。妊娠初期には夫婦の90%以上のものが知りたい情報があるとしていたが、その差異には顕著なものがある。知りたい情報としては次のようなものとなっている。

< 妻の場合 >

- a 胎内の様子をしりたい。病院では本の少ししか時間が無いし、下手すれば何秒しかないし、聞こうと思っていても、聞きわすれちゃうし。
- b 私は、自分の体ですね。……今の所、生まれて大丈夫か、それっばかり、自分の体と胎児のそういう出産直後の健康的なことばかり気になるので、初めてだと、私のように働いていると何が良くて、何が悪いのかというのが分からないんですよねー。

< 夫の場合 >

- a 今日のは赤ちゃんの良い部分、陽の部分で素晴らしいところがあるというものでしょう。それは分かるんだれど、僕は出てきたら（生まれたら）どう扱ったらいいのかといことが、赤ちゃんがこう言う信号を出しているときは、赤ちゃんにとって危険なんですよとかね、こう言う信号を出しているときは、嫌がる扱いをしてはいけませんとかね。そういうのがいいですね。変な所掻いているときは、

彼が何か知っているんだよというようなことを教えてくれるのがいいですね。あやせといわれても直ぐにはあやせませんからね。こういうときはどうしたらいいとか、病気したときはどうするとか。僕らは生まれてくる赤ちゃんの命をまもらなきゃいけないでしょう。普通の大人みたいにやればいいのかというところ……扱方が分からないというのが不安ですね。生まれたときに『お医者さんに聞いてみようと思っている』といいながら本読んで勉強しないんですが。

- b こういうビデオを作って欲しいんですよね。買いたいですよね。これをコピーしてほしいと思うんだけど、正直言って捜しているんですよね。子どもができるところから、体の中でどうふうになっているのかとか、出てきてからどういう経路たどってまあ、幼児期すぎるのかという、教育的な観点から作ったビデオどこで売っているのかも知らないし、見たいな—と思うんですよね。そこにあるの貰ったんですけどね、それもそれなりに、それはどちらかと言うとお母さんのための教育ビデオであって子どもがどうなっているか書いてないんです。どちらかという漫画でしか書いてなくて、現実に子どもがどうなっているか書いてないんですよ。で、そういうの割りと捜しているんですけど、売っているわけじゃないし。勿論本で読めばいいというけど、なかなか本読んで勉強しろなんていうと相当なエネルギーいるわけですよ。疲れちゃうんですよね。だから、僕はビデオの教材にするのが一番良いと思うんですよ。どんな人も見ても分かるわけだから。それは一つ大事なことでね。昔はね、お母さんと一緒に住んでいて、口伝えて赤ちゃんてこういうもんだというのあると思うんだけど、家みたいに親と離れて暮らしているの、そういう人多いでしょう。僕なんか全部初めてですよ。彼女もそうだけど、そうすると何がおこって、どうなるのか分からないから不安ですよ。普通、一般的にはどうなっているのかとかね、今、僕、一番不安なのは、出てきてからどうするのか一番不安なんだよね、全然わからないでしょう。おしめの代え方とか、本に載っているけど、現実に良く分からないですよ。で、親と離れているから、直ぐってわけにはいかないでしょう。映像的に聞くとかなり頭に入るんですよね。そういうのが欲しいんですよね。そういう人もかなり増えていると思うんだよね—。そういうの有ったほうが、子どものためにもいいんじゃないかな。

妻の場合は、生まれた後のことよりも生まれる前のことについて不安を感じ、それについての情報を得たいとしている。一方、夫の場合は問いが胎児についての情報ということであったが、胎児情報よりも生まれた後の育児に対して不安を抱いている。この様な妻と夫の知りたい情報のずれは妊娠初期にも見られた傾向である。なお、妻はいずれも拡大家族の家庭のメンバーであり、一方、夫はいずれも核家族の家庭の夫である。

ところで、妊娠中期に入つてつわりもなくなり、まだ胎動の感じないときには妻自身が

本当に妊娠しているのだろうかとか疑いたく成ることがあったと報告するものもある。また、夫の場合もつわりがおさまり、妊娠前と同じような生活をする妻を見ていると妊娠初期に努めて行った家事への参加や配慮も知らない間に減少したと報告している。このように、妊娠中期は妊娠の経過から見ても安定期に入り、妊婦自身にとっても外見的にもそれほど大変な印象を与えなくなっていることが、特に胎児についての情報を必要とする程度が減少する要因の1つと考えられる。

妊娠中期には妊娠に関する情報への要求は減少するとはいいいながらも、妊娠の経過について不安を抱いているものも少数ながらも存在するという事実に対して、具体的な援助体制の必要性が指摘される。

⑥夫の立ち会い出産

視聴した映像には出産場面も一部挿入されている。そこで夫の立ち会い出産について意見を求めたところ、立ち会い出産を希望するものは妻61.5%、夫53.8%であり、立ち会ってもらいたくない・立ち会いたくないとするものは夫婦とも30.8%であり、考えたことがないとするものは妻7.7%、夫15.4%である。その理由の具体例を以下に示す。

1) 立ち会い出産を希望

< 妻の場合 >

- a 側にいてもらえたらなーと思いますね。
- b 立ち会ってもらいたい。甘えているみたいだけど、一番主人に立ち会ってもらいたいし、ああいうシーンていうのは何回見ても、胸が詰まると言うか、何回見ても感動して、ここら辺がジーンとくるし、不思議だなーと思うんですけど、そういうのが妊娠して日が浅かったよりも段々今、だからいろんな本見て、出産の時の写真とか、絵とか、陣痛始まったとかあるでしょう、あれ見ると怖いなーと思うんだけど、そういうのがあればねー、見てもらいたい。笑い。
- c 立ち会って貰ったほうがいいのかもしれない。2人の子どもだから。
- d 立ち会ってもらいたいなーと思うんですけど、そういう所ないんですよー。掛かっている病院は、分娩室に入る直前まで身内の人がついていていいと言うので一応いいかなーと思ってそこにしたんですけどー、だけど、今ちょっとテレビ見たら凄いですね。ショックだわあんな血みどろになって出てくるなんて。笑い。ゾッとした。笑い。顔がもうすごく真っ赤で、この辺の色と違ってましたよね。大変なんだなー、赤ちゃんも大変なんだなーって思ってみていたんだけど、お母さんはケロケロした顔して、笑い。あれも意外だった、私、気失うんじゃないかと思っていたけど、全然そうじゃないの、笑い。
- e この間ニュース・ステーションで、お父さんが臍の緒を切るやつ見た時、すごく感激して涙出てきた。切った旦那さんもぼろぼろ泣いていて、そういうの

見るとやっぱり涙でてきて、あー感動するんだな—と思って。(夫は)絶対駄目だと思う。そばにいてほしいけど、この人の性格だと絶対嫌だと分かっているから、いたって何もしてくれないんだっらない方がいいし、本当はいてほしいですけどね。

< 夫の場合 >

- a 希望はある。彼女は嫌だといいますけど。(妻が)分娩室に入らっしゃるでしょう。こっちは何しているかというとその辺に居るわけでしょう。最近現実感が有りますから、会社でそういう話がたまに出るでしょう。生まれるときどうされていましてと聞くと、出張でどこかへいっていたとかね。酒飲んでいたとかね。本当にそういうもんなのかな—と思いますね。2日も3日も待たせると、最初の1日目位は連絡付くような場所に居るかもしれないけど、それからだんだん未だ生まれないのか未だ生まれないのかと思えば、仕事も溜まってくるし、そういう気持ちもわからん訳ではないという思いがあるんですよ。もしできるんだったら、生まれるところ見れば違うでしょう。実感というか。父親は分からないというか、自分で生むわけじゃないですから、痛みを知らないでしょう。見れば少しはね。
- b 立ち会いの希望します。一生懸命頑張っているのについてあげたいというのもあるし……
- c そういうのがあれば立ち会ってみたいと思う。一緒に生むんだと言うのを。雑誌で読んだこと有るんですよ。一緒に立ち会っている人、結構いるんですよ。一緒になってというのよく分かるんですよ。おもしろ半分じゃなくてね。
- d そう言われたら。そういうことがオッケーになったらそうする。
- e 許されるならば立ち会って見たいと言う、半分興味本意ということも有りますけど、自分の子どもがどういう形で生まれてくるのか非常に興味有るんですよ。生まれたものは、時間が立てば見れるけど、生まれてくるその過程を見たいと言う気持ちは有りますね。汚いと言うかあまり綺麗な場面じゃないそうですけどね。見ないほうが良いと言う人もいるし、見たほうが良いと言う話は余りきかないかな。見れば僕は見たいですね。一回でいいのか、何回もかは別ですけどね。まだ見たことが無いだけに見たいな—と言うか。出てきたものとしてしか見れないというか、実感が出来ないから、どうやって生まれてくるんだろうと言う、見たいな—という気はするんだけどな—。
- f 正直いってあんまり立ち会いたいと思わない。どうしてもと本人の望みと言うか、頼みが有ればそれは嫌とは言いませんけどね。興味云々でなくて、生まれた瞬間に立ち会うのは良いんですけど、それまでに本人苦しんだりしますよね、それ見ているのかわいそうになりますね。まあ、分かちあってあげたい

と思うけど、不可能ですしね。まあ、勝手かもしれないけどあまり、見たくないと言うか。まあ、そばにいて安心できるというのでしたら居てやったほうが良いと思う。本人が立ち会ってというところ……

- g 別に立ち会うこと事態は、拒まないですよ。それは生む人の、女の人の問題で、女の人が立ち会ってくれといえ、立ち会わざるを得ないと言うか、そういう感覚ですけれどもね。

2) 立ち会い出産を希望しない

< 妻の場合 >

- a 余り居てほしいとは思わない。やっぱり、大変な仕事だからそれを分かってもらおうと言うことは良いけど、実際側について一緒に呼吸したりするようだけど、一緒にいてもらいたくないという気持ちも有りますね。
- b 私はちょっと嫌ですね。まあ、もしもね、日曜日とかで時間が空いていけば、陣痛の時、一時期一緒にいてほしいかなーとかいう感じはしますけどね。生まれたらその時、外によく居るでしょう。その場というのはちょっと考えちゃいますねー。よく、苦しむところ見てほしいといいますね、だけど、そこまでは思わないですね。十分妊娠中の時なんかもいたわってくれていますし、よく投書なんかみるといっているけどそんなに恨みがましくは思いません。まあ、皆生んでんだから、痛い思いして生んでんだから普通に考えて、もし夫の方が立ち会いたいというのなら良いと思うけど、無理して縛ってまで立ち会ってほしいとは思わない。だけど、立ち会うことが認められてきたことは良い傾向だと思う。だから、選べるのが一番だと思う。
- c それほど立ち会ってほしいという気もないです。そばにいてもっらって心強いとか、そういう気も余り無い。自分で余り出産が重いとは思っていないから、母や姉の様子から出産そのものは心配していないんですよ。だからそれほど側に居てほしいというのもない。友達の話聞くと、すごい苦しんだから旦那さんがそばにいと、ついている人がちょっときついんじゃないかといって、そういう話も聞いたりするもんだから、私は一人でも大丈夫かなーと思って。

< 夫の場合 >

- a 自分のペースで生活していけなくなるでしょう。そういうのが嫌ですね。
- b 難しい質問ですね。立ち会ってくれといわれたら、嫌だというんじゃないかなー。おろおろすると思うしね。意外と私根性ないんです。度胸ないというか。やっぱり駄目ですね。
- c 俺、貧血おこしちゃうな。
- d 私、貧血起こしてたおれちゃう。こわいですね。すごく感動的だといわれたんですけどね。だめですね。何時なるか（陣痛が）わかんないですからね。機

会があればといわれても、男は待っていたほうがいい。(分娩室)の中に入っ
ちやうとちょっとしんどいですね。

3) 立ち会い出産について考えたこと無い

< 妻の場合 >

a どうか一、未だその話とか、自分だったらどうなるんだろう、というのが分からない。ただ、乱れないようにしなくちゃいけないと思っているだけで、だから(夫が立ち会うことが)心強いとか、不安に成るかもまだ分からない。その場になってみないと、『あっ、やっぱり居てほしいと思うかもしれないし』そう思えば居てほしいし、別に恥ずかしいとかそういうんじゃなくて、自分の気持ちの問題だけで…そういうの有るけどどうするって聞いたら『居てほしいと思うんだったら居るよ』とかなんとかそのときはいっていたので、あーあ一人任せなんだなーと思っていた。

< 夫の場合 >

a 立ち会うとすれば、いろいろ勉強しなきゃいけないけど、雑誌かなんかでも、ラマーズ法というのよく聞くんですね。あっても良いような気がするけどね。

b 特に理由なし

妻の場合は夫の立ち会い出産に対して積極的な希望を持っているのに対して夫が立ち会い出産を肯定する場合は、夫自身の希望によるものと妻の希望や医師の許可があればというように、条件付きのものがある。また、希望しない場合は妻の場合は自分一人の仕事と受け止めているのに対して夫の場合は明かに血を見ることへの恐ろしさがその理由とされている。このような分娩に対する関心の違いには多分に夫の性格との関連があることが示唆される。

⑦父親が子どもを抱いている姿

映像の中には子どもを抱いた夫婦が視聴者として参加しているため、母と子としてよりも父・母・子の3者関係にある親子の姿を目にする場面がかなり多い画面構成となっている。そこで、父親が子どもを抱く姿をどの様に受け止めたかを聞いたところ、好意的に受け止めているものが最も多く、妻では61.5%、夫では46.2%である。また、当たり前なこととするものは妻30.8%、夫38.5%である。何かぎこちなさを感じるとしたものは妻7.7%、夫15.4%である。父親が子どもを抱っこしている姿に対する感想の具体例を以下に示す。

1) 好意的に見る

< 妻の場合 >

- a 良いと思いますよ。おっばいやるのはお母さんしか出来ないけど、お風呂にいれたり、そういうのはお父さんがやるべきだと思います。母親だけのスキンシップだけじゃなくて、父親もスキンシップしないと子どももどの人が父親かよくわからなくなると思うんですよね。笑い。どの人に頼って良いのかわからんよ。
- b 昔は男の人は赤ちゃんの面倒はみませんでしたしね。だけどやっぱり、育児は協同と言うかね、そういう感じで良いんじゃないかと思いましたけどね。
- c 夫婦そろっているのは良いと思う。
- d 是非！（そうなって欲しい）笑い。スーパー行くと旦那さんが赤ちゃん抱いていて、奥さんが買い物しているのを見ると、良いなというか、ほら、結構皆奥さんに押し付けたりしている人っているでしょう。でもそういう人見るとあっ旦那さんも協力してね、かわいがってやているんだなーて、思うから是非してもらいたいと思う。
- e 良いなーという感じですね。
- f 私は子ども育てるの半分半分で当たり前と思っているので、笑い。そういうふうにしてもらえばいいと思う。
- g なんか、ぎこちないなという感じがして、でもいいもんですね。笑い。
- < 夫の場合 >
- a 物凄くいいと思いますね。もっともっとしてやったらいいんじゃないかなと思いますね。言っても言い尽くせないですね。もう速く抱っこしたいという思いで一杯ですね。
- b 自然で良いんじゃないんですかね。世話しないで遊ぶだけだったらいくらでもこう抱いてみたいなという気がするんだけど、ほとんど母親が世話するんですけどね、それがやらんきゃいけないというか、まあ、いるから全部まかしちゃうと思うんですが……
- c 何の不自然さも感じなかったし、親子だから自然だなーと言うか、自分でも抱きたいと思うし、とっても良いことだと思うんですけどね。
- d やー、俺も抱くだらうね。良いんじゃない、やっぱり、夫婦仲良い証拠なんじゃないの。旦那さん抱いてやるせば。
- e 抱いていたいと思う。
- d 子どもが出来る前はすごく羨ましいと思っていた。今は（胎児は）お母さんとのつきあいが多くでしょう。男って疎遠なんだなーと思っている。

2) 当たり前なこと

< 妻の場合 >

- a (夫は子どもを) 楽しみにしているし、自分自身、中学の時に父親をなくし

て余り小さいときの記憶もないし、あまり一緒にでなかったから父親というイメージも余り無いんですよ。父親に関しては白紙というか、無いとかじゃなくて、余り母親べったりだとも思わないんですよ。主人が凄く待ち望んでいるからああ言うのでも（父親が赤ちゃんを抱いている映像）、あまりお父さんがしてどうこうとは思わない。当たり前みたい。あーお父さんってこういうところがあるんだなっていう感じ。昔は、母親べったりと言うか、赤ちゃんとお母さんがべったりしていると思っていたんだけど、色々な人に会ったり、同級生が父親になったり、すごく子どもを可愛がる言うかそういうがあるので、『あっ、お父さんも可愛がるんだな』というか、そういうふうに思ってきて、今の映像見たかぎりでは、『あれ、お父さんが抱っこして』とは思わない。少し前から、主人がそうだし、夫婦で子どもを育てていくんだな一みたいなのは、感じてきたと言うか、私達もそう在りたいな一と言うか。

- b そんなに不自然に感じないですけどね。新聞かなんか読んでいたら、男の人が（赤ちゃんを）おんぶしていると皆が注目してみるけれども、それに関しておかしいんじゃないかと投書に書いてあったけど、抱っこは家の中とか、今はもう核家族が多いから奥さん手離せないとき、旦那さんがよく抱っこしているからそう不自然とかね感じない。
- c 私も全然気にならなかった。手疲れたらかわりばんこに抱いて、笑い。
- d ほとんどの人がお父さんと一緒だったから（父親学級）、思ったよりあれだな一と思った。育児ってまだ女の人中心という感じですよ。お父さんも参加というので、まあ微笑ましいですけどね。だんだん変わってきてるのかやという感じ。

< 夫の場合 >

- a 私は何の抵抗もないですよ。多分、自分の番になればするでしょうけれど、ただあまり一、いや、やるか、きつとやるな。抱っこしてその辺連れて行くのはきつと自分がその場になればやるでしょうけれど。（妻…今から楽しみってわけじゃないよね）ですよ。何て言うか、子どもは割りと付くというかね、兄貴の子どもが、わいわい何かという側によってきて抱っこせいで、おんぶせいでいわれてね、散々こう『うっせいな一』という感じ有りますので、そういうのがもう結構あるから、速く自分の手に抱いてこう言う風にやりたいなという感じには全然ならない。笑い。
- b ごく普通の当たり前なことだと思ってみている。
- c 極自然だと思いましたね。あんなな一という予想感はありませんけど。
- d 自然だなど。自分の子だから当然抱っこすると思うし。人の子を抱っこしたとは思わないし。僕はね自分の子どもに対して赤ちゃんが生まれてくると言うよりも、対等に僕と話す人間が直ぐに出てくるようなイメージがある。こう

生まれてきたら、一歳位になっていて。この辺ちよろちよろしていて親爺何やってんだって、そういうのが出てきてくれるといいなという希望が有ります。実をいってあまり赤ちゃんというイメージが余り無い。だから抱っこしたいとか、あやしてみたいとかそういうことはない。

- e 気にならんせば、ならんし、良いなあと思えば思うけど、やっぱり、自分で抱いてみなきゃわからんこてね。そうなってみなきゃあ。自分の子どもはね。人の子どもは別として。

3) なじまない感じ

< 妻の場合 >

- a 違和感無く抱いているんだけど、いまいち合わないという感じ。私も自分でも変なんです。いまいったように近くに赤ちゃんというよりも一歳位の子が多いから、この間赤ちゃんを見て『あーこれがあかちゃんなんだな』と思って見たので、ぽっと出てきたらもうその辺歩くようになっていて良いなーという感じで、ミルクの匂いするということけど、そんな感じ無い。私もあっち向いてるし、こちらもあっち向いてるし、どうなるんだろうって。笑い。

< 夫の場合 >

- a まだ私は、ああ言う場（父親学級）を設定してもらっても、気恥ずかしさは有りますね。まだ、結婚したとはいえ、自分自身の中で外界から社会的なものとして、夫婦なり、家族なりというものがそう強く認められていないから、笑い、そういう経験が浅いからまだ一緒に2人で居るとかね、子どもと一緒にいる構図というものを見たとしても、そこにまだ一歩さがった、自分が在るんじゃないかとそこから気恥ずかしさというの出てくるのだと思います。（Q抱っこすることについてはいかがですか）やっぱり同じですね。照れ臭いというか。（Q抱っこした経験は）怖々。本当、ETというか、まだ人間じゃ無い感じ。いっそう、動物の赤ちゃんの方がまだ可愛く感じる。だって、自分ちで飼っている犬、それは動物として認めているし、その赤ちゃんは、それと同じく見れるから、犬っていうのは絶対、動物としてみているからその赤ちゃんはまだ、犬と見ているわけでしょ。だけど、人間の場合は、人間というのは、自分なりに、ある程度人間らしい子どもならまだ視覚的にも、応答するにも、何か関わりもてるでしょう、コミュニケーション。だけど赤ちゃんだと全く無いわね、こっちからしてやる分だけ、一方通行だと、まだ経験ないから思うから、異星人という感じが、笑い。
- b この辺ではわりと男親が抱えていますけどね。珍しくないですね。私はああ言うの見てあまり気持ち良くなかったですからね。若いのがちゃらちゃらとしてと試してみてもいいけどね。自分のことになるとわからんですけどねー。

まあ、可愛いと思いますけどね。

父親が子どもを抱っこすることに関しては積極的に関心を示すものは、妻の場合は自分の子育て観との関係が認められるのに対して父親の場合は、子どもへの興味関心の強さがその根底にあることがうかがえる。一方、当たり前とするものには、その様な気持ちの高ぶりのようなものは特に感じられない。まさに、文字通り当たり前ことと受け止められている。ぎこちなさを感じるとするものは、父親が子どもを抱くことへのてらいが感じられる。しかしながら、子どもへの拒否的な感情は認められない。これらは本研究の協力者が育児への関心の高いもの夫婦であることによるものと考えられる。それゆえ、このような子どもに対する肯定的な感情が現代の父親一般の傾向であるか否かは明白ではない。

⑧育児分担

夫婦の育児分担に関した映像が視聴内容の中に含まれていたわけではないが、どのような育児分担を考えているについて聞いたところ、夫婦ともに61.5%の者が分担を予定しており、分からないとするものは38.5%である。どのような育児分担を考えているか具体例を以下に示す。

< 妻の場合 >

- a お風呂に入れるのは一人では大変ですので入れて貰えればと思っている。きつとなんでも頼めばしてくれるんじゃないかと思います。
- b この間、父親学級で沐浴の実習やって、それから得意になっちゃって、風呂で練習しているんですよ。タオルを赤ちゃんの代わりにして。
- c 沐浴。笑い。ある程度までは、母親が相手で言いたいと思うんだけど、女の子の遊び方と違うので、男は男同士がいいかなーと思って、母親がベッタリしているのも良くないし。
- d お風呂にいれるのは、男の人の方が手が大きくていいって話聞くし、友達なんかは毎日旦那さんがお風呂に入れるという人多いから、奥さんむしろ外に待っていてその後のミルクやったり、着替えさせたりというのが奥さんで、お風呂入れるのは旦那さんというのがほとんどですよ。だから、やってもらうつもりでいるんですよ。笑い。私、家にいるからたまたま手を離せないときはお願いすると思うんですけど。
- e お風呂くらい
- f でも、最初はこわいだろうしね。落としたりこまっちゃうと思うしね。生まれたての赤ちゃんでなく、もうちょっとすれば、どこかへ行ったりするときはね、お父さんが抱いていけばいいんだし、お母さんはいつも接しているんだし、特別にどこかに行くときは、お父さんにバトンタッチして、それじゃないとね。お母

さんだけにベッタリと言うわけにはいかないし。よそのおじさんになっちゃうからね。

- g まあ、想像を絶する大変さだと聞いていますけどね。なるべくイライラしないようにと思っていますけどね。でもね、飼いだんなんかも、すごくきれいにしていたのに、お母さんになった途端に、ボロボロになってね、笑い。本当にね、体にちょっと泥が着いただけでも嘗めてきれいにしていた犬が、もう凄いですおばさんになっちゃって、子どもを育て上げるのを見ていると、犬だってがんばっているんだから、この位はやんなきゃ、笑い。暫くはボロボロだろうなと思ってね。この人は本当に具合が悪いときは労ってくれるだろうし、私よりも赤ちゃんに触れることに抵抗無いらしいですよ。そんなに無理に役割分担は考えていない。
- h 自分で出来ればいいんですけどね。(風呂から)上がったとき、待機して居る人といれる人と別れるので、やっぱり楽な方を男の人が選ぶので、どっちかというを入れる方が楽だと皆いうので、楽なんじゃないかなーと思って、笑い。

< 夫の場合 >

- a わざとするという訳じゃないけど、必要なことはしないとまずいでしょう。(Q具体的には)決めてませんけどね。出来る範囲と言うことで、乳は上げられないしね、出来ることはしないといかんだろうと。さぼるという気はないですよ。決まっているというのはおかしい。…子ども中心ですよ。子どもがまずいことは、一人でいれるならほっておけば良いんだけど、出来ないわけですよ。人間の子もってのは、動物もそうですけど。その分、必要な分は手助けが必要でそれはどちらがやっても関係ないことで、やれる範囲でやるというのが家の考え方ですから。
- b まだ、具体的には聞いていない。まあ、2人で子どもをつれて歩くとなれば、子どもを抱いて歩くのは、私がやらんきゃあいけんでしょうけど、おむつ取り替える役はこっちの方にやっていただかないと、まあ私もやらんきゃあいけんと思いますけどね。
- c 私が聞いているのは、子どもをお風呂に入れるのは、絶対一人では出来ないからという話を学校の先輩とか聞いているんですよ。子どもをお風呂にいれんきゃいけんから今日は付き合われなとかいうのが、何人かいますしね。やっぱり、兄貴の所を見ていれば、『おーい、ほら上がるぞ』と兄貴がお風呂、湯つけてやって、『ほら上がるから準備せい!』って、声掛けて、バスタオルで包んで、暖かいところでちょちょちとお姉さんが世話していますけど、そういうの見ていますので、そういうところをやぱり、手伝うというか、やらないとどうにもならないだろうなということは考えていますけど、それ以外は全く考えていない。
- d ミルクはでないし、笑い。(妻…お風呂位だよ) うーん……

- e 風呂に入れる役だとかいっているすけ。うんこしらんきゃ良いけど（妻……着せるのと、風呂に入れるのと、風呂入れるほう簡単ですよ）やっかいだね。
- f 具体的にどういうことがあるのか分からないのですが、お風呂はどうこういってますよね。お風呂はお父さんが入れるぞと思っています。あとはね、おむつとかいうこともありますし、まあその場に応じて、やれっていうのはやると思います。まあ、おむつはどうして良いか分からないし、周りに小さい子が居なかったのでそう言うの全く経験ないし、その場になればやるんじゃないでしょうか。だけど危なっかしくてやらせて置けないと思うかも知れません。
- g お風呂いれなさいって。少なくとも8時には帰ってきなさいと。そこまでつよくいいませんけどね。
- h お風呂、うーんちょっと難しい、わかんないなー、おしめもちょっと難しいですねー。（妻…皆難しい、笑い。）ちょっと考えつかないですねー。仕方がわかんないですね。近所の子どもも遊びにきていればわかるんですけどねー。全然、ちょっとこわいですねー。その時になれば、何とかすると思うけど、

育児の役割分担の内容についてみると、ほとんどの場合がお風呂に入れることとなっている。これは、父親学級でのメインの実習内容であり、父親学級に参加した夫は曲がりなりにもそのイロハを学んでいるということも関係しているものと思われる。さらに、他の育児行為と異なり、役割分担が明白であると言うことも関係しているものと考えられる。父親が育児行為に参加する比率は一般的な比率よりも高いが、育児行為の内容はお風呂に入れることに集中しており、これは一般的な傾向に一致している。

4) まとめ

妊娠初期と中期に第一子を妊娠中の夫婦を対象に刺激用ビデオフィルムの視聴を行い、映像に対する感想を中心に検討する。フィルムの内容は初期用のものは主に精子が女性の膈内に射精されてから受精するまでの過程が克明に動的な映像で描かれた部分と受精以降4ヶ月の胎児になるまでがやはり動的映像を交えて描かれている。これらの映像に対して、我が子の生命誕生が非常に巧妙な自然淘汰の過程を無事通過した結果としてある事を確認することで我が子への思いを深めるものは父親よりも母親に多く、父親の場合は映像に対して母親と同様な情動的体験をしながらも、それが我が子である胎児への思いに変わることはさほど顕著には認められない。また、妊娠初期にあっては、妊婦である妻の状況がつわりなど身体的にも精神的にも不安定な時期にあることも関与して妊娠に関する情報に関してかなり明確な希望を持っているものが多く、妊娠や育児情報伝達のネットワークが必ずしも効率的に機能していないことが示唆される。

妊娠中期におけるフィルムの内容は胎児の能力および新生児の運動・感覚能力などについて実験的場面での新生児の行動を映像化することで日常的な生活の場面では、往々にし

て見過ごしてしまふ、あるいはその様な能力の存在にさえ気付かないで終わってしまうような能力を効果的に呈示している。これらの映像に盛り込まれている情報そのものは、必ずしも視聴者にとっては新奇なものではない。しかしながら、内容の多くは単なる言語的な知識として理解されていることに過ぎず、実体験的に理解されているものでは無いことが多い。そのため、映像を見ることで知識の確認を行うと言う体験を多くの夫婦がしている。映像を視聴した体験は胎児や新生児に対して大変ポジティブな感情を喚起する効果を有している。この効果は夫婦のいずれにも認められたことから夫に対しても社会的機構の中で胎児や育児情報の伝達が図られる必要性が指摘される。その様な社会機構が確立していない現代社会にあっては、夫や父親は構造的にそれらの情報から隔離されている状況が明らかになる。

4. ビデオフィルム視聴時の心拍

妊娠初期(3・4ヶ月時)に初期用ビデオフィルムを、中期(7・8ヶ月時)には中期用のビデオフィルムをそれぞれ視聴する。視聴時に心拍計を着装し、心拍を情動の指標としビデオフィルムの各内容に対する反応を生理的レベルでとらえる。なお、視聴時の心拍は、R-R波により測定する。

視聴状況はほとんどの場合、協力者の家庭の和室に設置されているホームビデオを用いて座して視聴する方法をとり、視聴時の身体的活動水準を比較的一定に保つよう配慮する。ビデオ装置を所有していない家庭の場合は、家庭訪問時にハンディタイプのビデオコーダーと小型のモニターテレビを持参する。協力者には予め『最初の映像がテレビ画面に出現したら直ちに心拍計のスイッチを入れる』ように指示する。視聴する前に初期用については『科学写真家の世界の第一人者であるといわれるレナート・ニルソンによる映像であり、内容は受精から4ヶ月頃の胎児までの映像である』こと、さらにこれらの映像は『以前NHKで放映されたものを、編集したものである』ことを告げ、それ以上の説明は行わない。中期用については『映像は4ヶ月頃からの胎児の姿と生まれてまもない子どもに関する映像からなっており、以前NHKで放映されたものを編集したものである』と告げ、それ以上の説明は行わない。

(1) 初期のビデオフィルム視聴時の心拍

フィルムは9種の内容で構成させているため画面の流れによる前画面と後続画面のR-R波の平均値の有意差の検定は、対象者別に全部で8対のものについて行う。8つの全ての対に有意差が認められたものが妻に1名ある。ついで、7対に有意差が認められたものは妻の場合は3名、夫の場合は2名ある。以下、6対のものは妻3名、夫3名、5対のものは妻3名、夫4名、4対のものは妻2名、夫3名、3対のものは夫のみで1名、1対のものは妻1名となっている。妻も夫も多くのものに4対以上の前画面と後続画面の

R-R波の平均値に有意差が認められることからそれぞれの画面に対し、異なった情動を体験していたものと思われる。

R-R波値の低い方が高い興奮を示す。そこで、各内容に対応する情動を見るためにそれぞれの内容に対応する平均R-R波値の低い順に上位3位までの順位付けを行い、1位には3点、2位には2点、3位には1点のウェイトを与え、それぞれの内容について3位までのウェイトづけをした得点の合計値を対象者の各内容に対する情動的興奮の高さとする。情動的興奮の高さと内容との関係を見る。妻の場合、最も高い興奮が認められた内容は『卵管内の構造』であり、ついで『射精された精子が子宮内に入るための自然淘汰の過程』『押し合いへし合いして狭い子宮口を進む精子』『卵管内の精子』『卵管内の受精卵』となり、これらが上位5位を占めている。夫の場合、最も高い興奮が認められた内容は『卵管内の受精卵』であり、ついで『卵管内の構造』『卵管内の精子』『押し合いへし合いして狭い子宮口を進む精子』『射精された精子が子宮内に入るための自然淘汰の過程』となり、これらが上位5位を占めている。視聴することで興奮が認められた内容は『射精された精子が子宮内に入るための自然淘汰の過程』から『卵管内の精子』まではいわゆる射精から受精に至る過程においてより優れた精子が選択される自然のメカニズムを視覚化したものであり、後半は受精から4ヶ月の胎児に至るまでの発達を視覚化したものである。妻の場合は視聴時に高い興奮が認められたものはすべて前半の内容に対してであったが、夫の場合は最も高い興奮は受精後の内容に認められる。しかし、2位以下は妻と同様にすべて前半の受精のメカニズムに関するものである。

ビデオフィルムの視聴後に印象的な画面を質問した時に指摘されたものを画面と対応させると、妻の場合は『射精された精子が子宮内に入るための自然淘汰の過程』と『押し合いへし合いして狭い子宮口を進む精子』を最も多く印象的な画面として指摘している。ついで『卵管内の構造』であり、以下『卵管内の精子』、『胞胚から胚芽までの発達』、『卵管内の受精卵』『4ヶ月までの胎児』の順になっている。『受精卵内に精子から放出される遺伝子の様子』について印象的であったと指摘したものはない。夫の場合は妻と同様に『射精された精子が子宮内に入るための自然淘汰の過程』と『押し合いへし合いして狭い子宮口を進む精子』が最も多く、ついで『卵管内の構造』『卵管内の精子』『卵管内の受精卵』『胞胚から胚芽までの発達』を印象的な画面として指摘しており、後者の4つの内容は同順位となっている。さらに、『受精』『4ヶ月までの胎児』が続き、最も少ないのが『受精卵内に精子から遺伝子が放出される様子』である。妻と夫が印象的な映像として指摘する内容は比較的類似している。このビデオフィルム視聴後の印象的な画面と指摘された結果と心拍の結果を対応させると、妻の場合は69.2%、夫は30.8%が一致しており、一致率は有意に妻の方が高くなっている。これは夫の方が印象的な画面について語るとき余り感情移入せず、事実に対する驚きとしていたことが結果として低い一致率となったように推察される。

(2) 中期のビデオフィルム視聴時の心拍

フィルムは13種の内容で構成されているため画面の流れによる前画面と後続画面のR-R波の平均値の有意差の検定は、対象者別に12対のものについて行う。妻の場合は、有意差が見られた数は11対が最高で1名ある。ついで10対が4名、8対が2名、7対が3名、6対が2名、5対が1名となっている。夫の場合は、全てに有意差が認められたものが1名、10対が2名、9対が2名、8対が1名、7対が3名、6対が1名、5対が1名、4対が2名となっている。妻も夫も多くのものに6対以上の前画面と後続画面のR-R波の平均値に有意差が認められることからそれぞれの画面に対する前後の画面とは異なった情動を体験していたものと思われる。有意差が認められた対の数は夫よりも妻の方に多い傾向が認められ、妻の方が高い情動を経験しながら視聴していたものと思われる。

初期と同様に各内容に対応するR-R波の値の低い順に上位3位までの順位付けを行い、1位には3点、2位には2点、3位には1点のウエイトを与え、その得点の合計値を対象者の情動的興奮の高さとする。情動的興奮の高さと内容との関係を見る。妻の場合、最も高い興奮が認められた内容は『母子の遊び場面』であり、ついで『聴覚的能力・音の方向の定位』、『アメリカの公園でくつろぐ母子』が続いている。さらに、『出産場面と出産直後の母子』、『嗅覚・母親の肌えの匂いの識別』、『母親の呼び掛けに対する反応・同調行動』が同順位で続いている。その後に『視覚能力・追視』、『血流音に対する泣きの停止』が同順位で続いている。『日常的な世話』、『運動能力・原始歩行・把握反射』、『味覚』、『胎児の超音波映像』、『子宮内の音声の再生音』となっている。夫の場合は、最も高い興奮が認められた内容は『アメリカの公園でくつろぐ母子』であり、ついで『聴覚的能力・音の方向の定位』、『出産場面と出産直後の母子』、『味覚』・『子宮内の音声の再生音』・『日常的な世話』、『母子の遊び場面』、『母親の呼び掛けに対する反応・同調行動』、『運動能力・原始歩行・把握反射』・『血流音に対する泣きの停止』の順となっている。『嗅覚・母親の肌えの匂いの識別』と『胎児の超音波映像』はいずれも上位3位までに入る高い興奮を示すものは認められない。妻も夫も高い情動を示した内容は実験的に新生児の能力を呈示した内容ではなく、自然な状況での母親と子どもがくつろいでいるものと出産場面と出産直後の母親と子どもの様子というように決定的瞬間と言うような内容のものに対してである。

ビデオフィルムの視聴後に印象的な画面を質問した時に指摘されたものを内容と対応させると、妻の場合は『子宮内の音声の再生音』、『胎児の超音波映像』、『運動能力・原始歩行・把握反射』、『血流音に対する泣きの停止』、『出産場面と出産直後の母子』、『視覚能力・追視』、『嗅覚・母親の肌えの匂いの識別』、『母親の呼び掛けに対する反応・同調行動』の順である。夫の場合は『子宮内の音声の再生音』、『血流音に対する泣きの停止』、『聴覚的能力・音の方向の定位』・『運動能力・原始歩行・把握反射』、『視覚能力・追視』・『嗅覚・母親の肌えの匂いの識別』、『アメリカの公園でくつろぐ母子』・『味覚』・『母親の呼び掛けに対する反応・同調行動』・『日常的な世話』の順になっている。印象的と

されたものは実験的な手法によって初めて確認できる情報であり、心拍の結果とは異なっている。このように映像に対する情動的な興奮と情報としての新奇さは必ずしも一致するものではないことが明らかとなる。

(3) まとめ

初期用においても中期用においても視聴する映像の内容に対応する心拍の変化を見ると、夫婦のいずれにおいても内容の違いにより異った心拍が多く認められ、内容によって異なった情動体験をしていることが示唆される。また、先に、印象的な場面と言うことで夫婦のそれぞれが指摘した場面を内容と対応させて見た場合、指摘された内容と心拍によって高い情動が確認された内容は初期用においては、比較的良好一致している。しかしながら、中期用においてはほとんど一致は見られない。このような差異の原因の1つに、初期用と中期用のビデオフィルムの構成における違いが指摘できる。つまり、初期用のビデオフィルムは、内容的には女性の膣に射精させた多くの精子の中から1つの精子が受精するまでの自然淘汰、受精から着床するまでの自然淘汰、着床から4ヶ月までの胎児の発達が主たる内容となっており、全体の構成が発達と言う時間軸に沿って展開されている。さらに、前2者に関する説明が多分に擬人化されているため、情報そのものとしてよりも情報に情動的な興奮がとれない易い構成となっている。一方、中期のビデオフィルムの構成は、比較的良好独立した胎児や新生児の生活や発達に関するいろいろな側面の情報が集大成されたものとなっている。そのため、映像情報としての新鮮さと情動的な体験は初期用のものよりも分離されたものとして体験され易くなっているものと考えられる。

Frodi & Lamb は乳幼児のビデオフィルムに対する大人の反応を生理的指標からとらえ、生理的指標に関して性差および乳幼児との接触経験の有無が関与するものでないことを見出している。逆に、Feldman & Nash は乳児とその母親と同席したいろいろな年齢層の男女の行動を観察した結果に基づいて、実際に子育ての経験を持つものの方が乳幼児への反応性が高く、年齢や性によって一義的に決定されるものでは無いことを見出している。しかしながら、本結果では妻と夫の生理的レベルの反応にはかなり明白な差異が認められ、FrodiらやFeldmanらの結果とは異なっている。このような違いには本研究で用いた刺激用ビデオフィルムがFrodiらのものよりも複雑な内容であると共に、ストーリー性もあり、妻と夫がそれぞれ乳児や胎児に対して抱いている情動的体験がより明確に反映される可能性が考えられるがこの点に関しては今後さらに検討される必要がある。

5. 妊娠の経過と意識の変化

妊娠初期・中期・後期の3回対象者の家庭を訪問し、面接調査を行う。調査内容は資料1～3に示してある。初期と中期の内容は「妊娠について」「胎児について」「妊娠前」「出産後」「自分自身について」から構成されており、調査内容は類似した項目から構成さ

れている。しかし、後期の調査内容は新しく迎える我が子への思いを中心に聞いている。ここでは、妊娠の時間的経過により夫婦の意識がどの様に変化するかについて検討する。

(1) 妊娠について

妊娠を確認した平均週齢は、7.2週であり、全ての対象が産婦人科医の受診を受けて妊娠を確認している。確認の週齢をみると、基礎体温を計測していたものの方が妊娠を早期に確認している。

妊娠が分かって戸惑ったとするものは、夫(15.4%)よりも妻(61.5%)に有意に多い。妻の場合は戸惑った理由は、半数以上のものが計画妊娠で無かった(61.5%)ことにある。そのため、妊娠に気付くまでの間に喫煙・精神的ストレス・偏食など、胎児にとってマイナスになるような生活を経験しているために、それらのことが胎児に悪影響を与えたのではないかと心配するものが最も多い(50.0%)。ついで妊娠する時期が速すぎるとするもの(37.5%)となっている。その他戸惑いの理由としては、流産の不安やつわりに対する身体的苦痛(25.0%)をあげている。夫の方の戸惑いの理由をみると、出産が暑い時期にかかることや妊娠期の性生活などを上げている。夫婦で戸惑いの内容において大きな違いがあり、産む性か否かの違いが顕著に認められる。しかしながら、妊娠に対しては夫婦のいずれも肯定的に受け止めており、妊娠に因って生活の内容やリズムを変化させることは苦痛でないとしている。妻の生活における変化としては嗜好品(コーヒー、酒、煙草など)の摂取、車の運転、食事(カルシウムの摂取)などへの配慮であり、夫では喫煙場所の変更(妻と同席する場所では禁煙するなど)、家事の手伝い(洗い物、重いものの運搬など)、外出を控えるなどがあげられている。特に、夫の場合の生活の変化は、妻がつわりで物理的な意味でも妊娠前の生活を継続できなくなっていることが大きな要因となっている。このことは、妊娠中期には妻の状態も安定するため家事参加が減少することからも伺うことができる。

夫の妻への心遣いについてみると、初期には69.2%のものが意識して妻に対して気配りをしているとしているのに対して中期では38.5%と有意に減少する。このような妊娠経過に伴う夫の妻への心遣いの減少は妻によっても同様に受け止められている(91.7%→69.2%)。しかし、その比率を見ると妻は夫の認識している以上に夫の配慮を肯定的に受け止めている。このずれは、夫は具体的な行動レベルでの配慮を問題にしているのに対して妻の方は、日常生活における些細な手出しや口出しや夫が妊娠そのものを喜んでいることや胎児に関心を示してくれることを妻への心遣いと受け止めていることに起因している。

(2) 胎児について

胎児のために自分の生活をコントロールする比率についてみると、妻では初期(61.5%)よりも中期(76.9%)の方が有意に高くなっており、その事を辛いと

うけとめているものは初期には0%であったのが、中期には44.4%と上昇を示している。夫の場合は妻のお腹の胎児のことを考えて自分の生活をコントロールしているものは妻に比較すれば非常に少ない。その比率は初期(30.8%)より中期(15.4%)の方が減少している。これは妻への心遣いの場合と同様に、妊娠初期にはつわりなどの為に妻の生活が外見的に、妊娠による影響を強く受けているように見えたのに対して中期には外からはあまり大変そうに見えなくなったこともあって、夫が友達や職場の仲間関係に時間を使うようになったことをその理由としている。

胎児の存在を実感する比率について見ると、妻の場合は、初期(61.5%)よりも中期(92.3%)の方が有意に高くなっている。どの様なときに胎児の存在を実感するかを見ると妊娠初期ではつわりをその指標としてあげるものが多く、中期においては胎動をあげるものが多い。妊娠中期に入り、つわりもなくなり、まだ胎動も感じないときには妻自身が、『本当におなかに赤ちゃんがいるんだろうかと不安になった』とするものがかなりある。中期について妻と夫の比率を比較すると夫の比率(61.5%)は有意に低い。夫の場合もやはり、胎動をあげるものが最も多い。他には妻の体型の変化をその根拠とするものがある。

また、胎児のことを話題にしたい気持ちについてみると、妻の場合は、初期(92.3%)にはほとんどのものがその様な気持ちをもっているが、中期(53.9%)には半減する。これは1つには妻の方から話題にしなくとも体型的に妊娠情報を提供するようになることに起因している。夫の場合は逆に初期(32.3%)よりも中期(61.6%)の方が有意に高くなっている。しかし、夫の場合は、自分の方から話題にすると言うよりも聞かれれば話すというものの比率が高くなっている。

胎児に望む性についてみると、妻の場合は、どちらの性でもよいとするものは初期(38.5%)よりも中期(66.7%)に有意に上昇する。これは、初期には男子と女子を望む比率が同じ(30.8%)であったのに対して中期には女子を望むものが有意に減少(8.3%)したことに起因している。夫の場合は逆にどちらの性でもよいとするものは、初期(76.9%)よりも中期(58.3%)の方が有意に減少し、中期には男子を望むものが有意に上昇する(15.4%→33.3%)。このように比率に有意な差が見られるが、その理由を見るといずれかの性を望む場合もその性でなければならぬというほど積極的な理由は見られない。女兒を望む理由としては、妻の場合は『可愛い』『母親が女ばかりの家庭で育ったから』『(妊婦の体型の変化などから)人が女の子というから』、夫の場合は『可愛い』『なんとなくそう思う』と成っている。男児を望む理由は、妻の場合は『甥が多いので』『婿取りで苦労したから』『扱いやすい』『(妊婦の体型の変化などから)人がいうので』『なんとなくそう思う』、夫の場合は『つわりがひどいから』『一緒に酒を飲みたい』『一緒に遊べる』『夢でよく見る』『女の子だと心配』『(妊婦の体型の変化などから)人がいうので』『信じている』などと成っている。特に中期では『五体満足であればどっちでもよい』とするものが多く、中には『一人目はどっちでもよい』とするものもあ

り、子どもの性別への拘りはむしろ第二子以降の問題となる可能性が示唆される。

胎児のことを話題にする比率は、初期（83.3%）、中期（84.6%）ともに有意差は認められない。胎児に関する話題は、夫婦にとって最大の関心事の1つであることを示している。

妊娠に関連した体験を苦しいことと受け止める比率について見ると初期（92.3%）にはほとんどのものが、苦しい体験と受け止めているが中期になると初期に苦しいと受け止めていたことも過ぎ去ってしまうとそれ程辛いことでは無かったとするものが多く、中期には妊娠初期からの中期末までの妊娠期間を振り返って苦しいことがあったとするもの（60.0%）は有意に減少する。しかし、妻の傍らで妊娠の経過を体験している夫にはその様な変化は認められない。妊娠による妻の様子を大変な事と受け止めているものは初期（75.0%）と中期（77.8%）ともにほぼ同じ比率を示している。

不安についてみると、妻は初期（76.9%）中期（84.6%）後期（69.2%）ともに多くのものが流産・早産・出産時の痛みについて不安をもっている。特に、その不安は後期に比較して初期・中期において有意に高い比率を示している。夫の場合には、初期（69.2%）中期（58.3%）後期（66.7%）いずれの場合も妻よりも有意に低い比率を示し、妊娠の経過による有意な変化は認められない。不安の内容を見ると妻の場合は、初期には流産（40%）、出産に関する痛み・異常分娩・高齢出産（40%）、病気（20%）などがその主な内容となっている。一人で幾つも上げているものもある。中期は出産に関するもの特に痛みについて不安を抱いているものが多い（54.5%）、ついで早産（27.3%）、病気（18.2%）、五体満足で生まれるか（18.2%）、夏を無事に過ごせるか（18.2%）となっている。また、後期においては、分娩時における医療ミス（44.4%）、出産に関する痛み・異常分娩（33.3%）、五体満足で生まれるか（22.2%）となっている。夫の場合は妊娠初期には五体満足で生まれるか（44.4%）、流産（33.3%）、その他母体の病気・怪我、異常分娩、生まれた後の法的手続きなど心配しているものがそれぞれ11.1%ある。中期には五体満足で生まれるか、母体の病気・怪我がほぼ同率となっている。後期には五体満足で生まれるか（66.6%）が最も高く、ついで分娩時の母体（22.2%）、母体の怪我（11.1%）となっている。妻は産むと言うことに関して不安を持っており、夫は生まれる子どもに対して不安をもっており、その比率は妊娠の経過により強まる傾向が認められる。

（3）出産後について

生まれてくる子への感情についてみると、妻の場合は嬉しいとするものの比率には変化が無い（いずれも38.5%）が、何となく不安になるとするものは初期（23.1%）よりも中期（38.5%）に有意に上昇し、どちらともいえないとするものは初期（38.5%）よりも中期（23.1%）に有意に減少する。夫の場合は、初期（53.8%）には半数以上のものが嬉しいとしているのに対して後期（23.1%）には有意に

減少を示す。不安については妻の場合と同様に初期（7.7%）よりも中期（38.5%）に有意に上昇を示す。どちらともいえないとするものは、妊娠経過による変化は認められない。夫と妻では新しく迎える子どもに対する感情において異なった体験をもつことを示している。

出産後の子どものことを話題にする比率をみると、初期（54.5%）よりも中期（84.6%）の方が有意に高い。

（4）自分自身について

小さいときから子ども好きであったか、親モデルの有無、親になる自信について見る。この調査は妊娠初期にのみ行う。

妻の場合は子ども好きであったとするものは50%、子ども好きではなかったとするものは41.7%、普通とするのは8.1%であり、夫の場合は子ども好きであったとするものは83.3%、子ども好きではなかったとするものは8.3%、普通とするのは8.3%である。子ども好きであったとするものは、妻よりも夫の方が明らかに多い。本対象の夫の特徴であるか否かは、比較するデータがないため結論づけることはできない。

夫婦のそれぞれが親モデルを持っているかどうかは、自分の親のようにになりたいとするものは、親モデルを持つものとする。このような親になりたいという考えを持っていることとこのような親になりたいという実在するモデルを持つ場合をここでは別のものとして扱う。それゆえ、親モデルを持たないということは、理想の親イメージを持たないということを示している訳ではない。

妻には自分の母親のようにになりたいかを問い、夫には自分の父親のようにになりたいかを問う。妻の場合自分の母親のようにになりたいと積極的に回答したものは15.4%であるのに対して母親の良いところだけは取り入れたいと条件付きで肯定するものが30.8%ある。母親のようにはなりたくないとするものが53.8%あり、半数以上のものは具体的な親モデルを持っていない。夫の場合は、自分の父親のようにになりたいと積極的に回答したものは15.4%であるのに対して父親の良いところだけは取り入れたいと条件付きで肯定するものが7.7%ある。父親のようにはなりたくないとするものが46.2%、考えたことがないとするものが30.8%あり、やはり半数近くのもの具体的な親モデルを持っていない。妻と夫の間には有意差は認められない。

親になる自信については、中期にも聞いている。妻の場合は初期にはかなりあるとするものは16.7%、中期23.1%、なんとかやってくとするものが初期41.7%、中期61.5%、余り自信がないとするものは初期41.7%、中期15.4%であり、妊娠経過により親になる自信に顕著な増加が認められる。夫の場合はかなりあるとするものは初期16.7%、中期23.1%、なんとかやってくとするものが初期75.0%、中期61.5%、余り自信がないとするものは初期8.3%、中期15.4%と妊娠経過に伴う顕著な変化は認められない。妻が中期に入り親になる自信を増したことに

よって、夫との有意差は認められない。

夫の場合は、余り考えないタイプだから、人もやっていることだから、親を頼りにする、その場その場でなんとかかなと思うのがその理由となっており、初期にも中期にも差異は見られず、夫の場合は子どもの諸々の事態に対処する具体的知識なり、技術をもっていることによる自信ではなく、事態を比較的楽観的に受け止めていることによる自信と考えられる。妻の場合は初期には、夜泣き、夜起きること、病気、しつけなど比較的具体的な状況を描き、それに対処することができるかどうかを自信のバロメーターとしているが、中期には自分なりにやろう、あるいは人もやっていることだからということで自信を増すという変化が多く見られる。また、中期において自信がないという場合はその理由をみると、初期とは異なり甘い親になりそうであるいは特に理由がないというようなこととなり、その理由に変化が見られる。

(5) まとめ

妊娠の経過によって「妊娠について」「胎児について」「出産後」「自分自身について」の意識がどの様に変化するかについて見た結果、次のようなことが明らかとなる。

妊娠については、ほとんどの夫婦にとって計画妊娠でなかったことから妊娠という事実に対して戸惑いを覚えたものはその影響を直接受ける妻の方に強い。しかしながら、その戸惑いは妊娠に対して拒否的感情を生むものにはなっていない。妊娠による生活の変化は妻の方に多く見られるが、妻のいずれもその変化を肯定的に受け止めている。また、夫も妊娠を肯定的に受け止めており、それは妻への日常生活への手助けおよび配慮ということによって表現されている。妻は妻に対する夫の配慮を夫が考える以上に高く評価している。しかしながら、妊娠中期に入るとつわりなど妊娠による身体症状が顕著で無くなるため、夫の日常生活への手助けおよび配慮は明らかな減少を示す。

胎児については、妻の場合はお腹の赤ちゃんのためにということで自分の生活の中で行動を規制したり、制限するというような生活のコントロールは妊娠初期よりも中期に有意に多く見られるようになり、それを辛いことと受け止める比率は中期に有意に多くなる。中期にはほとんどのものが胎動によって胎児の存在を確認している。特に、妻の40%近くのは胎児に話し掛ける行為と胎動とを関係づけており、このような妻の解釈は胎児への肯定的な感情の保持に貢献しているものと推察される。夫の場合、胎児の存在を胎動によって感じるとしたものはすべて、胎動を夫が胎児へ話し掛けことに対する応答と解釈しており、単なる物理的な胎動によって胎児の存在を確認しているのではなく、解釈という行為を介して夫は胎児の存在を確認しているものが多い。胎児と直接的な関係をもっていない夫にとってはこのような解釈が成り立つような場が設定されることの意味は大きいものとなろう。また、胎児に関する話題は夫婦の最大関心事の1つとなっていて妊娠経過による変化は認められない。生まれてくる子どもに望む性についてみると妻と夫では明らかに異なっている。妻の場合は初期には男児を望むものと女児を望むものとどちらの性で

も良いとするものに等分させている。しかし、中期にはどちらの性でも良いとするものが有意に増加する。夫の場合は逆に初期にはどちらの性でも良いとするものが高い比率を占めているが、中期には有意に減少し、男児を望むものが初期に比較して中期に上昇する。このような変化もその理由を見ると、妻の場合も夫の場合もそれほど積極的な理由は見られず、仮に生まれた子どもの性が親の期待する性と異なったとしてもネガティブな影響はあまり無いものと考えられる。むしろ、親の希望する性と子どもの性のずれの問題は第二子以降に発生する可能性が示唆される。

妊娠中の身体的変化に伴う苦痛は、その渦中にある時は大変なことで受け止められていることが多いが、妊娠の経過によってその苦痛が過ぎてしまうとあまり苦痛なことではなかったと受け止められる傾向がある。これは本研究の対象者の中期までの妊娠経過が順調であったことに多分に起因するものと考えられる。

ビデオフィルムの視聴時の聞き取り調査では初期には妊娠情報に対して強い要求があるが、中期には胎児情報への要求の少なさから妊娠に関する不安が余り無いものと推察する。しかし、多くのものが不安をもっていることが明らかとなる。不安の内容の半数以上のものは分娩に伴う苦痛に対する不安となっている。このことから先のビデオ視聴の結果と本調査結果が矛盾するものでないことが明らかとなる。不安の内容は妊娠の経過によって異なっており、それぞれの時期に適切な情報を流すことで不安の解消をはかることは可能となろう。後期には分娩に関わる医療ミスについて多くのものが不安を持っているが、この問題が当時社会問題化していたこととの関係が指摘される。これらについても適切な情報が流される必要性が指摘される。

生まれてくる子どもへの感情は妻と夫では異なった体験をしているが、生まれて後の子どものことを話題にする傾向は初期よりも中期のほうがより現実味があるため多く話題とされている。

子ども好きであるか否かをみると夫の方が妻よりも小さいときから子ども好きであったとしている。この様な差異が果たして夫の一般的傾向であるか否かについてはさらに検討する必要がある。妻も夫も半数以上のもが自分の親を親モデルととらえておらず、彼等は自分と親との関係を必ずしも肯定的な関係ととらえていない。この様な関係が次の親子の関係の中にどの様に継承されていくのかについてはさらに検討が重ねられる必要がある。親になる自信についてみると夫の場合はかなり楽観的な理由によって自信を得ているのに対して妻の場合は初期にはかなりシリアスな状況を思い描いて自信を欠いているが、妊娠の経過と共に妻の場合もかなり楽観的に変化して行くことが明らかとなる。

妊娠に関する意識は妊娠の経過によってかなり顕著な変化を示し、その渦中にある時は必要以上に不安を増大させることもあり、適切な情報のネットワーク化が図られることが必要と考える。さらにその様なネットワーク化にあつたては、妻と夫が等しくそれらの情報が活用できるような配慮が望まれる。